
狂戦士の旋律

キャラメル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂戦士の旋律

【Nコード】

N7535L

【作者名】

キャラメル

【あらすじ】

謎の光に包まれて行き着いた先は自分たちがいた世界と全く違う世界だった。ベルセルクとTOAのクロスオーバーです。

光に包まれて・・・。（前書き）

やってしまった・・・。

こんな難しい作品をクロスさせてしまうなんて。

まあでもがんばります。

だって両方とも好きな作品ですから。

でもTOAをクリアしたのはだいぶ前です。

間違いがあつたらビシバシ指摘してください。

ガッツ無双になってしまいかも。

光に包まれて……。

目の前には今までいた場所とは違う光景が広がっていた。

（ここは…？俺は一体…そうだ！！）

そう、やっと眠りにつけたかと思ったたら不思議な夢を見たのだ。いつもの夢魔が見せる夢ではなかった。

久しく感じていない神々しい感覚を感じ、そして体全体に響くように声が聞こえたのだ。

『彼らを助けてほしいのです。どうか……、どうか……。』

彼は意味が解らず、聞き返そうとした。だが声が出なかった。そして眩しい光に包まれたかと思うと気づいたらここにいたのだ。

（いったいなんだってんだ？ほかのやつらは……？）

だが誰もいなかった。

（どうなってやる。……あん？）

彼は何か自分のそばにいるのに気づいた。小さい人型の妖精、エルフだ。仲間になった者達の中で一番付き合いが長いであろうそれはグースカいびきをかいて寝ていた。

全くわけがわからない。

（とりあえず起こすか。）

彼は小さいそれを指ではじいた。

「のわ！？なんじゃなんじゃ！！」

「起きたか。」

「こらこら。もっと労わりをもって起こせよ。てあれ？ほかのみんなは？」

「わからねえ……。なあ、お前なんか不思議な夢をみなかったか？」

「夢？うゝゝん……。」

妖精はそう考えていると頭がショートしてきたのかプスプスと音を立て始めた。

「悪かった。もういい」

どうやらみていなかったようだ。というつことは巻き込まれたのか？

そう考えていると、いきなり妖精が、

「あれゝ？」

と疑問を浮かべた。

「どうした？」

「うん。なんか違うんだよ。」

なんつーか世界全体の雰囲気か。まるで音楽につつまれてるか……。

とにかく全然違うよ。」

「いまいち要領を得ねえな。」

「つまりあれだ。誠にいいにくいんだけど……。」

「なんだよ?」

「ここは異世界だ。」

「異世界? どういうことだ?」

「うん、なんかいままでいたところはただただ血なまぐさいだけーみたいな雰囲気だったんだけど。」

この世界はそれに加えてなんつーかメロディーというか……。とにかくそんな感じのものが世界全体に浸透してる感じだ。とにかく全く違う世界だよ。」

「おいちよつとまで!! じゃあ俺達は……。」

「うん……。ここは異世界だからみんなもないし、それに……。」

彼は絶望した。ふざけるな! やつと……。やつとあいつが俺と同じ土俵に降りてきたんじゃないか。

そしたら今度は俺自身が、あいつのいる世界から離れてしまったて

言うのか？

……ふざけるな！！！！

しばらく二人に間に沈黙が続いた。

「……なあなあ、気持ちはわかるけどとにかくここから移動しよう。まだ方法がないと決まったわけじゃないんだし。」

そうだ、まだこの世界から出れないと決まったわけじゃない。絶望的な状況は今までも何度も味わってきた。

そしてそのたびに己の剣で生き抜いてきたのだ。

「そうだな……とりあえず人を探そう。少しでも情報は多いほうがいい。」

そうして彼はこの世界での第一歩を踏み出した。

狂戦士・黒い剣士・烙印の剣士・？く者・ベルセルク。数多くの呼び名があるが、彼の本当の名はガッツ。

闇を彷徨い続け、自身の体を、魂までも削りながらも、復讐のためにそして大切なものを守るために戦い続けてきたのだ。

あきらめることは彼には許されない。いや、自分自身が許さない。

本当の絶望ならとうに味わったのだ。今更こんなことへでもない。

そして傍らの妖精はもちろんパツク。なんだかんだでいつの間にかガッツの相棒？になっている彼は相も変わらずどんな時でも陽気なままだった。

とにかく、彼らはおりたつたのだ。

このオールドラントに・・・

光に包まれて・・・。（後書き）

意見感想をおまちしております。

それと前書きにも書いたとおり、TOAをクリアしたのはだいぶ前です。

ググっても解らないことがあったらここで質問するかもしれません。その時はどうか応えていただくとようお願いします。

一人目は……（前書き）

アビスキャラが登場です。

少しご都合主義が……。

駄文ですいません。

一人目は……

・イニスタ湿原・

という場所に二人は飛ばされたわけだが、そんなことは知らない二人はとにかく人がいないか探し歩いていた。

「ところでさ、ガッツが見た不思議な夢ってどんなだったの？」

「あん？……ああなんか助けを求めてたみたいだな、『彼らを助けて欲しい』ていつてた。

ほかに何か言ってたような気もするが、いまいち思い出せねえな。

」

ガッツはそういうと、苦虫をかみつぶしたような表情をした。

彼にも不安がないわけではない。

いきなり見知らぬ世界に放り出されたこともあるが、もっと不安なことがある。

その一つが、狂戦士の甲冑だ。

装着するだけで身体能力を上げることができる。

そして、一度発動すれば身体能力が極限まで引き出され、同時に自我を失い周りに生きているものを敵味方関係なく殺し続ける。いままでは、発動してもシールケのおかげで何とかかった。

しかし、彼女がいらない以上発動後に元に戻る手段がない。

下手をすれば助けて欲しい『彼ら』をも殺しかねない。

もう一つの不安はキャスカだ。仲間がいるとはいえ、最愛の女性をほっというおけるはずがない。（もつとも最初はほっという旅をしていたが。）

そして極め付けが首の烙印。例え、異世界であろうと亡霊はいる。それらと呼ばせてしまつては『彼ら』助けるどころか、とり殺されてしまふかもしれない。

そんなことを考えていると、「そうか!!」

いきなりパツクが叫んだ。

「なんだよいきなり。」

「これからガッツは人助けをしていけばいいんだ。」

何を言い出すんだ、この栗妖精は。

「だってそうだろ？その謎の声はガッツに『彼ら』を助けて欲しいんだ。だったらその『彼ら』が解らない以上、闇雲だけど片っ端から人助けをするしかないよ。」

確かにそうだ。

その謎の声の正体はガッツをこの世界に呼び出し、『彼ら』を助けて欲しいのだ。

ならその『彼ら』を助けることができれば、ガッツは元の世界に戻れるのだ。

確かにそうだ。

しかし……………。

「この世界にどんだけ人がいるか解らねえが、どれだけ人助けをすりゃいいんだよ。」できれば謎の声ももっと具体的に何をしてほしいのか述べて欲しかった。

「まあ、でもなんかこの世界で起きるんじゃないの？俺達だけとはいえ、世界の壁を飛び越えて移動させちゃうほどの力をその声の主は持つてるんだ。そんな力をもつものなんて結構限られるでしょ。例えば……神様とか？」

「神様ね……、だったらよほど不親切な神様だな。」

「たはははは、確かにそうだなあ。でも、もしもその類が助けを求めたんだとしたら、この世界に何かが起きるはずだよ。」

（神、まさかゴッドハンドとなにか関係があるのか？）

だが、世界が違うのだ。まったく関係がない可能性もある。

「そついや、この世界には音楽があふれてるとか言ってたな。」

「うん……。それでね、さつき気付いたんだけど」

とパックが言いかけた時、

「イオン様！！大丈夫ですか！？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

「よかった、にしても何なのよこの怪物！！」

「以前本で読んだことがあります。この湿原にはベヒモスという怪物がいると。」

「えっ！？でもそれは伝説の話じゃ」

その後も何か話していたようだが、とにかく誰かが怪物に襲われているようだ。

「ガッツ君、早速一人目だねえ。」

「ったく、とんだ慈善作業だぜ。」

パックは厭らしい顔でガッツに笑いかける。

「大丈夫だって、チミなら大抵のヤツ余裕でしょ。まあ怪我したら治療してやるから安心したまえ。」

「気楽なもんだ。」

そいとうとガッツはかけ出した。

「ああっ！！ちょっとちょっと」

あわてて、パックはガッツを追いかける。

そしてその時さっき言いかけたこと思い出す。

（そういえば、なんでガッツからも微かにメロディーがきこえるんだろう？）

一人目は・・・（後書き）

すみません。少しどころではありませんでしたね。

御意見・御感想をお待ちしております。

助け。
(前書き)

やっと、あのフレーズがでてきます。
ベルセルクならこれがないとだめですよね。

まあ、でも私の文章はぐだぐだです。

助け。

アニス・タトリンはフォンマスターガーディアンである。

この年で、ローレライ教団の最高指導者である導師イオンをお守りするほどの重役を担う彼女である。

そこそこの修羅場はくぐってきた。

なにより、お人よしの両親のせいで小さいころから家にくるそつちの方々を見て相手をしてきたのだ、度胸も据わっている。

しかし、そんな彼女もまだ少女と呼べる年齢である。

まだまだ経験したことのない状況など腐るほどあるのだ。

その状況が目の前に現れている。

「イオン様、速く逃げてください!!」

「でもっ!!」

アニスは、相棒のトクナガに乗りベヒモスと対峙する。

だが先ほど少し交戦してすぐに実感した。

（だめだっ。私一人で勝てる相手じゃない!!）

ほかの護衛を任されていたオラクルの兵士も大半がやられている。

すでに、アニスは死を覚悟していた。

自分はフォンマスターガーディアン、導師の剣となり、盾となる存在。

だからこそ、逃げることは許されない。

なのに導師ときたら。

「待っててください、すぐに助けを呼んできますから!!」

「そんなことしないでいいですから!とにかく逃げてっ!」

「アニス」

「速く!!」

お人よし過ぎる。自分の両親といい勝負・・・いや、勝っているかもしれない。

「イオン様をお守りするのが私の役目なんです!だから早く逃げてください。」

だがそんなやり取りを待ってくれるほど目の前の敵は甘くはなかった。

「グウオオオオオオ!!」

口からよだれを垂らしながら醜い魔物が襲いかかってくる。

「くうっ!!」

なんとかガードをした。

しかし、まだ相手は攻撃の手を緩めず襲いかかってくる。

凶悪に発達している腕がアニスに襲いかかる。

だが受けてばかりでは勝てない、アニスはそのことをよく理解していた。

相手の一撃を何とか受け流す。

（ここで、でかいのを入れられれば!!）

隙の出来た懷に技を繰り出す。

「臥竜撃っ!!」

（まだだ、まだいける!!）

「奥義、翔舞煌爆破!!」

（やった!!）

だが、戦闘において圧倒的な者を相手にする時、深追いは絶対にしてはいけないことであることをまだ若い彼女は知らなかった。

そしてそれを痛感する。

「そんな!？」

目の前には無傷のベヒモスが立っていた。

「グルアアアア！！」

あつけにとられていたアニスは諸に相手の一撃を受けてしまう。

ドシャアッ

「きゃうっ！」

たまらず地面にたたきつけられる。
するとそこへ、

「アニス！！」

駆けつけたのは導師イオン

「イ・・・イオン様あ？ど・・・どうして。」

「アニスを置いてはいけません！！」

そうだった、この人はお人よしではあるがかなりの頑固者でもあるのだった。

だがそのおかげで自分は導師を守れなかった。

「ハア、ハア、た・・・たまには、・・・私の言うことも・・・聞いてくださいよう・・・」

「そんなことを言っていないで！さあっ、立つんです！」

イオンはその細い体でアニスの肩を担ぐ。

しかし……。

ズン、ズン、

ベヒモスのすさまじい重圧をともなった足音が聞こえてくる。

そして目の前に立ちはだかる。

「くうつ。」

イオンは悪態をつきながらも、何とかアニスを担いで逃げようとする。

「うわっ!!」

しかし、おぼつかない足がもつれて盛大にこけてしまう。

「イオン様ハア、ハア……。速く、逃げてえ……。」

しかしアニスの悲痛な叫びもむなしく後ろは壁、ベヒモスはすでに目の前。

もう、イオン一人でも逃げ切れる状況ではない。

二人とも目をつぶり、覚悟した。

迫りくる……。死を。

ズンッ

そう覚悟した時だった。

すぐ目の前に何かが降りたった。

ベヒモスの攻撃ではない。

別の何かであることは確かだ。

二人は恐る恐る目をあける。

きすぎた

それは、剣と言っにはあまりに大

大雑把過ぎた

大きく、分厚く、重く、そして

それはまさに鉄塊だった

その鉄塊を構え、黒い鎧を身にまとい、黒いマントたなびかせる黒い剣士、ガッツが二人を庇うように剣を構えている。

イオンは声を出すことができなかった。
アニスも、先ほど受けた一撃を忘れたかのようにその黒い剣士を見入っていた。

「グルアアアアアッ！！」

だが、ベヒモスはすかさず攻撃を繰り出す。

ポオンッ！！

だがその一撃を繰り出すために伸ばした腕は届かなかった。

代わりに、その腕を宙高く切り飛ばされていた。
そしてその隙を逃さずにガッツは足元に潜り込み、

ポオンッ！！！！！！

先ほどの一撃よりも大きな音とともに鉄塊が振られた。

それと共にベヒモスはバランスを崩したように倒れる。

二人は何が起きたのか解らなかった、だが次の瞬間理解した。

片足を切ったのだ。

しかもわずかに重心が傾いているほうの足を、

（あの一瞬の隙で、それを見極めたというの？）

（すごい……）

二人が茫然としている間に戦闘は続いていく、するとそこへ、

「こらこら、二人とも危ないから離れて。」

いきなりかけられた声に驚いて、二人はあたりを見回す。

「こっちだ、こっち。」

声のした上を見ると何かが飛んでいた。

そこにいたのはまさしく小さいころ絵本で見た妖精そのものだった。

「ふえっ？」

「よっよっ、妖精？」

「俺のことはいいから、ここは危険だから離れなさいってば。」

訳がわからない二人は言われるがままに従った。

「俺はパックて言うんだ。あんたらは？」

「ア、アニス」

「イオンです。」

「そうか、よかったね。二人とも。ガッツがいなきゃ今頃ひき肉になってたよ。」

「ガッツ？」

たまらずイオンが聞き返す。

「ああ、そこで暴れてるのがガッツ腕前は見ての通り！」

そう言われ、二人は戦闘しているガッツに視線を戻す。

すでにベヒモスは頭に一撃を与えられたのか、頭が半壊していてより一層醜くなっていた。

「うっ！！」

たまらずイオンは視線をそむける。

「あちゃー、ちょっとタイミングが悪かったね。」

バックは申し訳なさそうに言っているが、なぜか申し訳なさが伝わってこなかった。

そしてガッツはダメ押しと言わんばかりにベヒモスの首を両断していた。

止めを刺したガッツは剣の血糊を振り払い、背中に収める。

二人には、何故かその姿がベヒモスよりも恐ろしく感じた。

助け。(後書き)

これで、第三話は終了です。

戦闘描写は本当に難しいです。

て言っちゃうかこれ戦闘描写と呼べるのか？

御意見・御感想をお待ちしております。

イオンと云う人（前書き）

もっと長い文章を書きたいです。それにもっと、ガッツらしさを出したいのに。

イオンと云う人

正直ガッツは後悔していた。

そして、改めてこの世界に自分を飛ばした存在を恨んだ。

「助けてくださってありがとうございます。」

「あ、ああ……。」

どうしたらいいのか解らない。

普通だったらもつと気の利いたセリフを言つべきなのだろう。

だが、ガッツはお礼を言われることに慣れていなかった。

今まで自分の戦いに巻き込まれ死んだ人間はみてきた。

そして、死んだのは弱かったからだと言いつてきた。

だが逆に巻き込まれる形で人を助けたことはなかった。

仲間の危機に駆け付けたことはあったが、赤の他人を意図的に助けたのは今回が初めてかもしれない。

故に、どう反応していいのかわからない。

「そついえば自己紹介がまだでしたね、僕はイオン、彼女はフォンマスターガーディアンのアニスです。」

「はじめまして アニス・タトリンでございます。
このたびは助けていただいた上に傷の治療までしていただいて本当に
ありがとうございます、ガッツさん。」

どうやらパックが自分の名前を既に言ってしまったようだ。

一方アニスは不自然なことに気付いた。

ガッツが導師イオンの名を聞いても全く反応を見せなかったことだ。
この世界に住んでいる人間なら、ローレイ教団の最高指導者たる
導師の名を知らないはずがない。

というよりさつきから導師に対して失礼ではないだろうか。

こんなに導師がお礼を述べているというのに、

「ああ」

「別に」

「そうか」

といった気のない返事ばかりだ。

だが当の導師イオンは全く気にしていないようだ。

最もガッツは対応に困っているだけなのだが。

それに助けても何の変化もなかったところを見ると、声の正体があった『彼ら』が目の前にいる一行ではないようなので、ガッツはもう聞きたいことはさっさと聞いて立ち去りたかった。

そんなことを考えていると、

「あのーちよつと聞いていい？」

見かねたパックがフォローしてくれた。

この時、初めてガッツはパックに心から感謝した。

「はい、なんでしょう？」

何の事情もいないイオンは清々しい顔で対応する。

「ああー」と、すごい漠然とした質問なんだけど……。

「どう？」

「ハイ!?」

アニスとイオンの声が重なった。

この時、ガッツはパックに感謝したことを後悔した。

そんな質問をすれば、じゃあ何故こんなところにいるのかと聞かれる。

そして適当な言い訳ができなければ、本当のことを話さざる負えな

い。

そして別の世界から来たなどと言えば、怪しまれ情報を聞き出すことができないかもしれない。

たまらずガッツは顔を手で覆う。

「ちよつ、ちよつと待ってよ。じゃあなんでこんなところにいるんですか。」

思った通りにアニスが二人に聞き返す。

この時パックは初めて自分がちよつとマズイ質問をしてしまったことを実感し、なんとか言い訳を考えようとするが、

「あーーーーー、えーーーーっつと。」

8ビットの頭では何も思いつかなかった。

「ていうか、ガッツさんでしたっけ？」

あなたイオン様のこと知らないんですか？」

さらに目の前の少女は、自分達を追い詰める質問をする。

どうやらこのイオンという少年は、この世界に住んでいる以上知っているのが常識であるようだ。

「あなただって、スコアを呼んでもらったことぐらいあるでしょう？」

スコア？何だそれは、知らないものは知らない。

「じゃあ、「アニス、そこまでです。」

なんと以外にもイオンがアニスの質問を遮った。

「ですがイオン様、妖精さんとはかくこのひと怪しいですよ。」

「アニス、命の恩人に向かって失礼ですよ。」

イオンは静かにいった。

「何か事情があるようですし、ここは彼らの話を聞いてみましょう。」

ガッツはこのイオンの対応にどう答えようか迷った。

本当のことを話すべきか、イオンはずいぶんと人がいいようだがさすがにあんな世迷言を信じてくれるとは思えない。

だがこのままでは情報は得られない、せつかくの彼の対応無視して聞くという手もあるが、横に控えている少女がまたうるさく言うてくるかもしれない。

ガッツが迷っていると、

「ねえガッツ、本当のことを言っちゃおうよ。」

「言って信じるか？普通。」

「でもこのイオンっていう人は俺達の話をまじめに聞こうとしてくれてるよ、感じるんだ。」

「横に控えてるアニスってやつは不信感丸出しみたいだけどな。」

「それでもだよ、この人なんだか偉い人みたいだし。もしも信じてもらえれば・・・。」

そう、イオンはローレイ教団の最高指導者。

協力を得られればかなりのバックアップとなるかもしれない。

それに信じてもらえなくても、ここら辺の詳しい地理を聞ければなんとかなる。

「解った、話そう。」

そう結論付けてガッツは事情を話した。

・・・。

・・・。

・・・。

「はあ？何寝ぼけたこと言ってますか。」

予想通り、アニスはいかれた人を見るような眼でガッツを見た。

「異世界から来たなんてそんな突拍子もない話、だ〜れが信じんの

よー！！ねえイオン様「解りました、信じましょう」ってえー

「マジか？」

これはガッツも予想外だった。

「ちょっとー！！イオン様！！今の話のどこに信じられる要素があったんですか。」

その通りだ。

実際ガッツたちも信じられていないのだ、普通だったらこんな話をする人とはさっそくかわりたくないと思っるのが普通だろう。

逆の立場なら絶対にそうする。

「だって、突拍子もないこと言う必要ないじゃありませんか。
なにより、彼はスコアはおるか僕のこと、ローレライ教団のこと
も知らないようです。」

「だ……だからって。」

「それに……」

「それに？」

「彼は……、命の恩人です。」

またもや出た、イオン様必殺お人よし！！

「それではこれから行くあてもないんですか？」

「ああ。」

一方ガッツは最初こそ驚きはしたものの、どうやら信じてもらったようなので話を進めたかった。

「信じてもらえたなら話が速い、いろいろと聞かせてくれ。」

「ええ、もちろんです。道すがら話しましょう。」

ガッツはこの世界の成り立ち、地理、ローレイ教団について、スコアとは何かを聞いた。

「つまり、この世界で神に近い存在っていうのはそのユリアってやつなのか。」

「ええ、ローレイ教が信仰しているのはそのスコアを残したとされる始祖ユリアです。」

「そのユリアってのが世界を越えられるような魔法とか、術のようなものを残したっていうのは聞いたことないか？」

「いえ、ユリアが残したのはスコアだけです。そういった術はすいませんが聞いたことはありません。」

「ほかに、そういうことができるやつに心当たりは？」

「ううん……。やはりローレイでしょうか。」

「さっき言ってた、第七音素とかいううやつの集合体か。」

「ええ、しかしいるのではないかと言われてるだけです。

それだったら、まだ始祖ユリアがなんらかの形であなた方をこの世界に呼び寄せたというほうが説得力があるように思います。」

「もし、仮にそのユリアが俺達をこの世界に呼び寄せたならその助けてほしい『彼ら』になんか心当たりはあるか？」

少し考え込むイオン、だが……。

「すいません、見当もつきません。」

やれやれ、といったようにガッツは空を仰いだ。

「お二人はこれからどうするんですか？」

「さっきお前も言っただろ、行くあてなんかねえよ。」

「それなら、僕達と一緒に来ませんか？」

「ちょっと、イオン様!!」

「いいじゃないですかアニス。それにとても頼りがいがありますよ。」

「ブー、私じゃ頼りないって言うんですか？」

「いえいえ、アニスもとても頼りにしてますよ。」

イオンが自分を頼ってくれてるのはアニスも心の底では理解していた。

というより頼れる頼れないの問題ではないのだ。

このガッツという男の強さは次元が違う。

この男が元の世界でどのような生活してきたかは知らないが、とにかく人間離れしている。

判断力、状況の認識の速さ、戦士としての直感力、そして何より常識離れした鉄塊とよべる大剣をふるう並はずれた膂力。

いままで、自分より強い人間は見えてきた。

そしてこの男はその中のトップと言っても過言ではない。

何より自分が齒が立たなかったベヒモスをいとも簡単に倒してしまっただ。

「でも、どうするんですか？オラクル騎士団に入隊という扱いにするんですか？」

「いえ、それは何かと手続きがめんどくさいので僕が個人的に雇った傭兵というところで。」

うわゝ強引だゝ。

「おい、勝手に話を進めんな。」

「ええ？ダメでしたか？」

「ダメとは言つてねえさ、ただな・・・。」

「ただ？」

「俺を連れてくなら、覚悟したほうがいい。」

「お金のことですか？だったら「そうじゃねえ」えっ？」

「俺を連れてたら、後悔するかもしれないってことだ。」

この言葉の意味がわかっているのは、パックだけであつた。

イオンと云う人（後書き）

御意見・御感想をお待ちしております。

行き当たりばったりですいません。

戦場（前書き）

ぐだぐだですが、今回は少しイメージしたものがあります。短いのは目をつむってください。

戦場

すでにあたりには闇が広がり、恐ろしいほどの静寂が広がっている。

ガッツは焚火を背に向け、火に照らされている闇を見詰めていた。

イオンもアニスもすでに眠りにについている。しかしガッツは寝ることはできない。

烙印のこともあるが、すでに彼の体は闇に身をまかすことはできないのだ。

既に夜の半ばである。しかし、烙印からは血の一滴も流れない。

何度も手を当ててみるが反応はない。闇に眼を凝らしてみるが亡者の影も見えない。

（一体どうなってやがる？）

そう考えていると、後ろに気配を感じた。

「寝てなくていいのか？」

「そついうあなたは？」

イオンだった、

「少し事情があつてね、俺は闇の中で目はつぶれないらしい」

「大変なことがあったんですね」

そういいながら、イオンは隣に座り夜空を見上げた。だが、ガッツは相変わらず闇に眼を向けたままだ。

「では、長い闇の時間をあなたはどうかやって過ごしてきたんですか？」

「ずっと、こいつを振ってきた」

闇から目を離れたガッツは、側に置いてあったドラゴン殺しをにぎる。

「どうしてもこいつを叩き込みたいやつがいてな。だがそのために俺は、闇を這いまわる羽目になった。闇から出てくる奴らにこいつをぶち込みながら、必死でそいつにたどり着こうと藻掻いた」

剣を握る手に力が入る。

「必死で這いまわって、そしてついにそいつが同じ戦場に降り立った。そう思ったら、今度は俺が戦場から離れちゃった。やりきれねえもんだ」

イオンはいつの間にかガッツに眼を向けていた。

「不安ですか？見知らぬ世界に飛ばされて」

「戦場で安心なんか得られねえ。だが俺はこいつがあればどんな状況でも生き抜いていける自信がある。今までもそうだった、この世界でもそれを変わらねえよ」

その言葉に、イオンは何か熱いものを感じた。しかし、同時にその逆のものが感じられたのはなぜなのだろうか。

「きかねえのか？」

「なにをです？」

「今のおれの話、お前からすれば意味わかんねことだらけだろ。なんでもっと聞こうとしない？」

「興味がないと言えば嘘になります。しかしあなたは僕が観てきた人間の中でも、最も激しい生き方をしてきた人のようです。僕のような人間があなたを理解するのは、あなたから何を聞いても無理の様な気がします」

真逆の人間、自分から観てこれほどこの言葉が当てはまる人はいないだろう。

自分のようにきめられ、作られた自分とは違う。

自分が生きるために、自分の命を自分の手でつかみ取っていく。

それはとてもつらい生き方だろう。だが、イオンがあこがれる生き方であった。

そして、そのためには残酷にならざるを得ない。

それは、イオンができない生き方であった。

「それでいいだろ」

イオンはその言葉に心臓が跳ね上がった。

「お前には、お前の戦場がある。俺には俺の戦場がある。それぞれの戦場で生き抜いていけばいい」

胸が熱くなった。イオンは初めて衝動というものを味わった。

「お前はそこで戦えばいい、必死に抗い、藻掻けばいい」

「そこから逃げなければそれでいい。だがな、仮に逃げたとしてもそこにあるのは戦場だけだ」

イオンははつとし、頬に手をあてた。涙だ、なぜ泣いているのかわからなかった。

そしてガッツは何も言わずに、また闇に眼を向けた。

「何かあったら起こす、さっさと寝ろ」

ぶっきらぼうにそう言い放つと、ガッツは立ち上がり闇へと歩いて行った。

その後彼らは目的地である、キムラスカ王国の首都バチカルへと到

着した。

導師が来訪したとあつては大変な歓迎ムードだった。

導師としての務めを果たしながらも、イオンはこの時決心していた。

自分の戦場で、大きくはないが自分の戦いを始めることを。

戦場（後書き）

ガッツとイオンの会話を、ロスト・チルドレンの章のジルとガッツ
イメージしました。

でも駄目でした。

御意見・御感想をお待ちしております。

脱出決行（前書き）

もつすぐに本編へ突入できます。

脱出決行

今、オールドラントは緊迫状態であった。

いつ、戦争が起こっても不思議ではない状況。

十五年前のホド戦争以降、各地で頻発するマルクト、キムラスカ間の小競り合い。

それだけでも何人もの犠牲者が出ている。軍人、民衆問わず。

また長年続いている膠着状態は、両国にとってもいいことはない。

国力は疲弊するし、民たちの生活も脅かされる。

イオンは仲介役をずっと担ってきたローレイ教団の最高指導者、何とかしたいとかねがね思っていた。

そう思っていた中、二つのことがイオンの背中を押すこととなった。

一つはマルクト帝国皇帝ピオニー九世よりきた、両国間の和睦の仲介の依頼だった。

平和を好むイオンはすぐにでもこの依頼を受けたかった。

しかし、保守派のトップ大詠師モースがそれを許さない。

警備といいはり、軟禁に近い状態にすることも珍しくない。

しかし、そこに一筋の光明がさした。ガッツの登場である。

彼ほどの戦士がいるならば多少の追手も何とかなるかもしれない。

なにより、彼が戦うことを決心させてくれたのだ。

「そういうわけでガッツさん、どうか力を貸してください」

イオン達がダアトに帰還したため、一応雇われのみである彼も共にダアトにいた。

イオンがよく書庫にいるため、彼に手伝ってもらいながらユリアのことや、自分の世界に戻るための手掛かりがないかどうか探していたのだ。

「モースの監視の目は厳しいです、例え脱出することができても追手を振り払うのは容易ではありません」

「マルクトは協力してはくれねえのか？」

「もちろん彼らの協力があります、しかし表立った行動は国際問題になりかねません」

「導師を拉致した、なんて因縁アイツならやりかねないからね」

アニスも今回の計画のために、会話に参加していた。

「特にあなたに任せたいのが、追手の中にも参加してくるであろう六神将です」

ガッツも名前だけは知っていた。確かオラクル騎士団の中でも抜きんでて優秀な者達の総称だったはずだ。

イオンはおもむろに書類をガッツに手渡す。

「これが六神将に関する資料です。そして、脱出決行の日にダアトにいるのがこの三人です。」

そこには、シンク、アッシュ、リグレットという人物の名前が書かれてあった。

ガッツはそれらに眼を通す。

シンク、通称『烈風のシンク』

素早い動きを得意とし、そこから繰り出される攻撃からその名がついた。

アッシュ、通称『鮮血のアッシュ』

並はずれた剣の使い手、素早い太刀筋によって敵は瞬く間に鮮血に染まる。

リグレット、通称『魔弾のリグレット』

二丁銃の使い手、六神将のリーダー的存在で素早く打ち出される銃技によって相手は瞬く間に八チの巣になる。

「頼めますか？ ガッツ」

そう言われたガッツは資料を置き不敵に笑った。

「お前は雇い主だろ？ つべこべ言わずに、命令すりゃいいんだよ」
その言葉にイオンの表情が明るくなる。

「ガッツ、ありがとう」

ガッツは思い出す。

（そついや初めて鷹の団に入った時も、まかされたのは殿だったな）
既に過去となった黄金時代が、彼に最愛の人を思い出させた。

そして、決行の日となった。

あたりはまだ夜明け前であり、ひっそりと静まり返っている。

「まずは、ダート港を目指しましょう。そこにマルクト軍の協力者
いるはずですよ」

大人数だと気取られるため、メンバーはアニス、イオン、ガッツだけである。

「大丈夫、今のところ大きな乱れはないみたいだ」

パックのエルフ特有のセンサーは、まだ気付かれていないことを告げてくれた。

「便利だね。パックは、傷も治せば気配も探れる」

「ふおっふおっふお、わしに弟子入りすればそなたも夢ではないぞ？」

パックはいつの間にか、髭を付け見慣れない服を着ていた。

だが、アニスは華麗にスルーする。

「もうすぐで、街をでれます」

「あとどのくらいだ？」

「第四譜石の丘を越えればすぐですよ」

ここまででガッツは違和感を感じる。

静かすぎるのだ、話を聞くとモースというやつはイオンに好き勝手やられたくないようだ。

なのにここまですんなりと来たのはおかしい。

だがパックは何も感じていないようだ、やつの探知能力は癪だが信用できる。

「いや、案外楽勝だったね」

ガッツの心配をよそにそのパックは気楽なものだった。

「まだ油断はできません、いつ気付かれるかもしれませんし」

しかし、ここでガッツの勘は当たってしまっ。

「・・・いや、もう気付かれてるぜ」

その言葉に二人はあたりを見回す。

すると影からオラクルの兵士達が待ち構えていたように出てきた。

「くっ！ 既に気付かれていましたか」

イオンが表情を歪める。

「やっぱそう簡単にはいかせてくれないわけね」

アニスもトクナガを膨らませ臨戦態勢に入る。

「導師以外は殺してかまわん、かかれ！！」

隊長の号令と共に兵士達が声をあげて襲いかかる。

しかし、すぐに沈黙が支配することとなる。

轟音と共に・・・。。。。。

当初周りの兵士達は理解できなかった、気付いたら仲間が観るも無残な姿へとかわっていたのだ。

それはまるで、大砲に吹き飛ばされたかのような光景だった。

そして、視線の先には常人離れした鉄塊をもった黒い剣士が立っていた。

ガッツがこの隙を見逃すはずがなかった。

続けて剣をふるう。一振りすることに轟音と共に、四人から五人が吹き飛ばされていく。

人外たちの相手をしてきた修羅の剣が振るわれていることなど、この場にいる誰もが知る由もなかった。

だがそこにいる兵士全員が彼をみて感じた……………

『怪物だ……………』と。

アニスの働きもあって、敵兵たちはどんどんその数を減らしていた。

「頃あいだ！ イオンを連れて逃げろ！」

「了解！！」

アニスはその言葉と共にイオンを連れて走り出す。

「に、逃がすなあ!!」

戦意を喪失しかけながらも、兵士たちは命令を遂行しようとする。

だが……。

「ギャア！」

「ぐああ!!」

轟音と共に追撃しようとした兵士たちは、一瞬にして土へと帰って
く。

「どうした? こいよ」

ガッツはまだ余裕の表情で言い放った。

兵士達はその言葉で戦意喪失してしまった。

「ヒッ、ヒイ！」

「化けものだああ!!」

「逃げろ!! 勝てる相手じゃねえ!!」

兵士達は次々と配送していく、

「ぐあっ!!」

「ぐええ！？」

しかし、残り少ない兵士達バタバタと倒れたした。

ガッツのその目の先には、兵士の止めを刺す仮面をした少年と、その後ろにいる赤い髪の青年、そして腕を組んだ女性がいた。

「これだから、雑魚は使えない」

「シンク、その辺にしとけ」

「ハッ、もう死んでるよ」

（なるほど、確かに強い）

ガッツは素直にそう思った。おそらく全員がセルピコに劣らぬ実力を持っているだろうことが推察できた。

「貴様が最近導師に雇われた傭兵か」

「そついうあんたらは六神将か」

「こちらの自己紹介はいらないようだね」

「俺達は導師の身柄がほしただけだ。命が惜しければそこをどけ」

その言葉にガッツは不敵に笑う。

「アッシュだったか？ 悪いな、雇われた手前そついうわけにはいかねえんだ。あとシンクとリグレットだったか」

「ふーん、ホントよく調べてるみたいだね」

「名前を聞いたただけだ」

「じゃあ、これから名前以外も教えてあげるよ」

「あんたの名は？」

「……ガッツ、二つ名も何もねえただのガッツだ」

「そう、じゃあガッツ……死ぬ準備ができたら始めようよ」

シンクの挑発的な言葉は、ガッツにはほとんど聞こえていなかった。

久しぶりに、背中に何も気にせず獰猛な自分を解き放とうとしていたからだ

脱出決行（後書き）

次回は三人の六神将とガッツの真っ向勝負です。

御意見・御感想をお待ちしております

守るべきものとは・・・？（前書き）

お粗末な戦闘描写ですが、今の私にはこれが限界のようです。

今回は六神将ファンの方からブーイングが来そうです。

守るべきものは・・・？

防御はガッツには無意味だ。剣や防具で受け止めてもそれごと吹き飛ばされてしまう。

下手をすれば武器や防具ごと叩き切られてしまうだろう。

もちろん三人とも先ほどのガッツの戦闘を見て即座に理解した。

しかし、まだ彼らはガッツのすべての武器を把握していなかった。

故に、いきなりガッツが義手をこちらに向けた意味がわからなかった。

「散れ！！！」

だが一番の熟練者であるリグレットは即座に理解した。

義手の上にボウガンが付いているのを、打つ寸前のところで視認したのだ。

ドガガガガガガ！！！！

間をおかずに無数の矢が飛んでくる。

そして続けてガッツは矢を飛ばす。

完全に三人は面食らっていた。

リグレットの声がもう少し遅かったら、全員ボウガンの餌食になっていただろう。

（……なるほど、剣を振るだけが能じゃないようだね）

ここで、シンクが攻勢に出る。素早さが飛びぬけている彼は矢をかくぐり、並はずれた俊敏さでガッツとの間合いを詰める。

いきなり目の前に導火線のついた球が落ちてくる。

「なっ!？」

バアアン!!

寸前のところでバックステップで避ける。

（爆竹!？）

またもや新たな武器。あたりこそしなかったものの、十分な目くらましとなってしまった。

その隙にガッツは、アッシュへと接近する。

（速い!!）

あれほどの重装備をしている者の速さではない。

しかし、そこにリグレットの攻撃!!

「ちいっ!!」

鈍い金属音が響く。

咄嗟にガッツはドラゴン殺しでガードした。

この隙をアッシュは逃さずに一閃！

完璧に死角からの攻撃。

「終わりだよ！！」

さらに僅の時間差でシンクの攻撃が加わる。

だがなんと、両方の死角からの攻撃をガッツは見えているかのように避けた。

「「なっ！！」」

二人の驚愕の声が重なる。

その隙に、ガッツはいったん距離をあけつつボウガンで牽制をする。

（馬鹿な！！ 完璧に死角だったはず！！）

ガッツが一对多数の戦闘を何度もくぐりぬけてきたこと三人は知る由もない。

だがガッツも内心驚いていた。

完璧に死角を突いてくる攻撃、あとコンマ一秒気配をとらえるのが

遅かったらやられていた。

加えてガッツは銃を目にするのは初めてである。

（予想以上に厄介な代物だな）

リグレットを先にたたくべきと考えたガッツは、彼女を間合いに収め横なぎに払う。

だが予想していたようにリグレットは距離を空ける。そこに空振りした隙を逃すまいとアッシュとシンクが挟撃する。

しかしここでガッツは足を切り替え、

「でありやああ！！」

そのまま振りぬいた。ガッツもまたリグレットが距離を空けるのを予想していたのだ。

そしてその先にいたアッシュは何とか避けるが、シンクはよけきれずにガードする。

「グウツ！！」

受け身を取ったものの、かなりのパワーで吹き飛ばされたため完璧に相殺することはできなかった。

着地したリグレットが、すかさず攻撃を加える。

気配を察知したガッツは、打たれる前に何とか身をそらして避ける。

「フウウウウ・・・」

止めていた息を吐き出すように、ガッツは息を整える。

その頬にはリグレットのかすった弾が傷跡を残していた。

シンクを吹っ飛ばしたものの、まだ決定的なダメージを与えられていない。

戦況は辛うじて拮抗していた。

そう、拮抗しているのだ。

オラクル騎士団でも、特別優れた戦闘能力を持つ六神将相手にたった一人の傭兵が互角に渡り合っているのだ。

わずかの時間の攻防であつたが、三人はガッツの底知れぬ戦闘力に息をのむ。

だが当のガッツには余裕がなかった。自分でもわかる、内にある黒い炎の勢いが徐々に強くなっているのを。

（黙ってる！！！！）

狂戦士の甲冑だ。少しでも気を抜けば食われるだろう。

先ほどの攻防では甲冑の力を最小限に抑えながら戦っていたため、彼は見た目以上に精神を消耗していた。

だがそれを表に出すことはできない、気付かれればそこに付け込まれるのが戦闘というものだ。

だが気を静める間もなく敵は襲いかかってくる。

ついに後衛についていたリグレットまでもが、前衛に混ざってきた。

至近距離で放たれた弾を鈍い音と共にはじく、その隙にシンクが懷で全体重を込めた一撃を放つ！！

「ぐお！？」

堪らずよろめく。そこにさらに、

「烈破掌！！」

アッシュのさらに重い一撃が入る。

「ぐはああ！！」

アッシュの一撃でついにガッツは倒れる。

そこに上空からリグレットのけりが入った、

「なに！？」

だがガッツは咄嗟にその一撃を剣でガードする。

（これが女の一撃か？）

かつて受けたグルンベルトの攻撃ほどではなかったが、ガードできていなかったかなりのダメージになっていたであろう攻撃だった。その攻撃の反動を利用してガッツは起き上がる。

（なるほど・・・、一気に三人で片を付ける気か）

正直二人相手なら、何とかあったかもしれない。

しかし三人同時に攻めてこられるとなると、さすがに厳しいものがある。

いくら一対多数の戦闘に慣れてると言っても、目の前の三人は亡者どもとは圧倒的にレベルが違う。

なにより戦い方というものを、三人が三人ともよく理解していた。だがそれはガッツも同じ。生まれたときから戦場にいる彼は、何度も死線を切り抜けたのだ。

加えて言えば、使徒でも最強と呼ばれるあのゾッドとも五分に渡り合ったのだ。

（あいつに比べればまだましたよな・・・。）

もしあいつがここにいれば「ふがない」の一言でも言われただろうか。

そう思いガッツは不敵な笑みを浮かべる。

「ハッ、随分と余裕みたいだね!!」

「シンク!! 挑発だ、乗るんじゃない!」

だが、ガッツはこの笑みと共にまるで雰囲気が変わった。

(殿にこだわりすぎてたみてえだな)

そしてガッツは攻めに転じる、受けに回るなど自分らしくない。

甲冑に飲み込まれまいと、少し抑え過ぎていたようだ。

ここで死ぬわけにはいかない、彼にはやるべきことがあるのだ。

ついに彼は獰猛な自分を解き放つ、内にある炎が大火となる前に勝負を決めるきだ。

「くっ!!」

シンクは彼の振り落とされた剣を何とか避ける。

しかしガッツは攻撃の手を緩めない。

(くそっ!! なんて速さだ!)

攻めに転じたガッツは先ほどまでとはまったく別人だった。

そしてついに捕える。

「グハッ!!」

シンクは咄嗟にガードするが、壁に打ち付けられ気絶してしまった。
止めを刺したかったが、二人がその隙を与えず背後から攻めてくる。
しかし二人の攻撃は当たらず、そこには巨大な剣だけが地面に突き刺さっていた。

ガッツは剣で己の体を持ち上げ、逆に二人の背後を取る。

二人とも即座に反応したが、避けるにはもう遅過ぎた。

ガッツの渾身の一撃が二人を吹き飛ばす。

「グウッ！」

「グハッ！」

二人とも咄嗟に反応したためガードは間に合った。

しかしあの一撃を受れば無事では済まない。

リグレットは気絶、アッシュは気絶こそしなかったものの体を激しく地面にたたきつけてしまった。

「シイイイイ……」

ガッツは呼吸と共に、高ぶった気を沈めた。

そこに体をよろめかせながらアッシュが立ち上がる。

「あんだ・・・・・・・・ハア、ハア・・・・・・・・人間か？」

「・・・・・・・・一応な」

「へっ、一応・・・・か」

その言葉と共にアツシュは崩れ落ちた。

そこにガッツが歩み寄る。

アツシュは死を覚悟した。仕方がない、これほどの男ならと目をつむり。

「・・・・・・・・殺せよ」

（ナタリア・・・・・・・・、ゴメン約束守れなくて）

ガッツは止めを刺そうとしたその時だった、

（助けて・・・・・・・・彼ら・・・・を、どうか・・・・）

ガッツははっとした、

（夢の声？）

「パツク！！ 聞こえたか？」

「ふえ！？ 何にも聞こえないよ！！」

ガッツの鞆の中に避難していたパックは、いきなり声を掛けられて慌てながらも答える。

（どうなってやがる？）

考え込むガッツ、しかし頭の中に声は響く。

（彼は……、アをくつ……、……う）

「何なんだ！！ てめえは一体誰だ？」

そこで彼ははつとする、

（まさか、こいつが『彼ら』のうちの一人なのか？）

だが今はどうこうできる状況ではなかった、いつ新たな追手がかかるともわからない。だが彼が『彼ら』の一人ならば殺すわけにはいかない。

「ちっ！！」

不機嫌そうにガッツは剣を納める

（とりあえず、イオン達に追いつくか）

ガッツはダアト港に歩を進めようとした時、

「ま……、待て」

アッシュが声をかける、

「何故……、こゝ、殺さない」

ガッツは振り返らずにいった。

「事情が変わった。……戦いたかったらいつでもきな、相手に
なつてやる」

そういつて、ガッツは駆け出した。

（クッ……クソッ!!）

力が足りない、そう思った同時にアッシュは気を失った。

――ダート港――

そこには無事にマルクト軍と合流できていたイオンがいた。

「導師、そろそろ出発しないと」

「解っています。ですがもう少し」

イオンは今か今かとガッツを待っていた。

「イオン様、速くいかないと」

「すみませんアニス、ですが彼を置いてはいけません」

こういうところでは、やはり彼は頑固だった。

だがダアトからここまでどんなに急いでも十分はかかる。

それにガッツがやられている可能性もあるのだ。

「導師、後五分で出発します。よろしいですね」

「ジェイド……」

そこにはマルクト帝国軍大佐、ジェイド・カーティスがいた。

「すでに約束の時間は過ぎています。これ以上待てません」

イオンも内心解っていた。自分はとてもわがままを言っていることを。

しかし無情にも、時間は過ぎてしまう。

「時間です、そのガッツと言う人が無事であることを祈りましょう」

「……」

しかたなく、イオンは沖にあるタルタロスに乗り込むため小舟に乗りこむ。

そのとき、

「大佐！ 何者かがこちらへ近づいてきます」

「追手か？」

「いえ、オラクルの兵ではないようです。それに一人のようです」

「貸してください！！」

イオンは双眼鏡をのぞいていた兵士から強引にそれを奪った。

「ガッツ！！」

「うっそ！？」

イオンがのぞいた先に、必死に走ってくるガッツの姿があった。

ジェイドもほかの兵士から双眼鏡を受け取り、イオンと同じ方向を見る。

そこには、必死に走ってくる黒ずくめの剣士がいた。

「ガッツ！ 無事だったんですね！」

「ハア、ハア、まあな」

「ホントに六神将を倒してきちゃったよ」

アニスが驚愕の声を上げる。

「いや、止めはさせなかった」

「ガッツが無事なら何よりです」

そこにジェイドが近ずいてくる。

「なるほど、待ったかいはあったようですね」

「あんたがマルクトの？」

「ええ、マルクト帝国軍大佐ジェイド・カーティスです」

そういつて「左手」を差し出す。

「ガッツだ。イオンに雇われてる。……ところでその手はこれを解つて出してるのか？」

そういつてガッツは「左手」の義手を指さす。

「ええ、もちろんです」

そういつたジェイドの顔は満面の笑みを浮かべていた。

（くえねえやつだ）

そう思いながらもガッツは「左手」をさしだした。

かくして、脱出は成功した。

しかし、まだ和平締結への道は始まったばかりである。

守るべきものとは・・・？（後書き）

すみません、ジェイドはもう少しカッコよく登場させたかったです。

ガッツと六神将のバトルに納得いかない人もいるかと思います。

しかし、私の中でガッツはかなり強い部類なんです。

原作を読んだ方には解ると思いますが、剣の丘でのゾッドとの戦いは作品中の中でも屈指の激しいバトルです。

あれほどの戦いをできるガッツなら、やっぱ六神将にも勝てるのではないか？と思いこのような結果としました。

御意見・御感想・御指摘をお待ちしております。

謁見（前書き）

すいません、短いです。中身が濃いわけでもありません。ていうか、親書を受け取るまでの経緯はオリジナルです。

謁見

ガッツはこの世界に来て一番驚いている状態だった。

マルクト帝国の首都グランコクマにある城。

イオン達はまずマルクト帝国皇帝、ピオニー九世に謁見していた。

ところがこの皇帝、堅苦しいあいさつが終わったと思ったらいきなりラフな態度になってしまった。

「いや、堅苦しいあいさつはほんとやなもんだ」

ミッドランドの国王は尊厳王と言われるほど聡明そうな王だった。

王と言うものはえてして皆そうだろうと思っていたガッツはまさに面食らっていた。

「ねえねえアニス、この王様は普段からあなの？」

「いや、私も初めて会ったからこれは意外だったね」

そして皇帝の横に控えているジェイドは、頭を抱えていた。

（あいつもなかなか苦労してるみたいだな）

ジェイドの意外な苦労が発見された瞬間であった。

「ま、和平締結も大事だが導師の身に何もないのが一番。ご無事を

お祈りしていますよ」

「篤いご厚意、ありがたく思います陛下」

ガッツは最初、イオンについてくる気はさらさらなかった。

だがイオンがどうしてもということでは仕方なく、この自分にとって場違いなところに来ていた。

確かにここの皇帝は気さくな人間の様だ。だがガッツはこの謁見の間の雰囲気だけでうんざりしていた。

自分には合わない。動物は状況に特化していくものだ。とくに人間ほど環境によって変わる生き物はいないだろう。

ガッツは戦いに身を置いてきた人間だ。以前祝勝会で豪華なダンスホールに来たことがあったが、第一印象は「ケバい」の一言であった。

「そこの二人はフォンマスターガーディアンか？」

唐突にピオニーは後ろの二人に話を振る。

「はい、フォンマスターガーディアンのアニス・タトリンであります!!!」

彼女は珍しく緊張していた。いくら気さくな皇帝とはいえども皇帝は皇帝、やはり緊張しているようだ。

「はは、そう硬くなるな。で、そっちは？」

ピオニーは視線をガッツに向けた。

「俺は雇われの身だ、オラクルの人間ですらない」

ガッツはめんどくさそうに答えた。元の世界で王様の話を

「長つたらしい話なんか聞く気はない」

といってふけてしまうほどだから当然と言えば当然だ。

「だろうな」

ピオニーはそんなガッツの態度を気にも留めず、意外な言葉を言った。

「お前は、騎士なんて柄じゃないもんな。悪い奴には見えんが、オラクルに入ろうとしたら門前払いくらいそくだ」

「たはは、言われちゃったな」ガッツ

パシッ、コキヤッ、ボトリ

栗が泡を吹いていた。

「だが……強いな」

イオンとアニスは驚いたようにピオニーを見た。

「真っ向勝負ならお前でも勝てないだろ？ ジェイド」

そう言つてジェイドのほうを見やる。

「まったく……部下とは言え、よくそんな質問できますねえ貴方は」

「だが事実だろう？」

「ええ。確かにあなたの仰るとおりです」

なるほど、とガッツは思った。

（伊達に一国の長をやつてゐるわけじゃないようだ）

国のトップとして、人の実力を推し量る才。ピオニーは一目見ただけでガッツの強さを見抜いたようだ。

「その強さ、今回の和平締結のために役立ててくれ。アニスもな」

「は、はいっ！！」

「……………」

ガッツはその後無言のまま、謁見は終わった。

キムラスカ王に宛てた親書を受け取った一行。

休みたかったがいつ大詠師派の追手がかかるともわからないため、すぐに出発の準備にかかった。

「まずはエンゲーブへ向かいます。そこから国境を越えてキムラスカ領内に入ります」

タルタロスに乗り込んだ一行は、ジェイドから道順の説明得を受けていた。

「大詠師派の追手にきずかれぬよう目立たぬように行動する必要があるため、巡回艦を装いながら進んでいきます。そのため……」

「この世界に疎いガッツはほとんど聞き流していたが。」

・ユリアシティ・

「あのガッツという男、もしも放っておけば厄介なことになるかと」

セレニアの花が淡く光る薄暗い部屋にリグレットはいた。

そして彼女の先にはオラクル騎士団主席総長。

ヴァン・グランツ

栄光をつかむもの

「お前から見てその男はどうだった」

「底知れぬ強さを感じました。あの實力はおそらく」私よりも強い
か「いえ！！そのようなことは」

「隠さずとも好い、お前ほどのものがそれほど取り乱すのだ。想像
に難くない」

「・・・いかが取り計らいましょう？」

「お前に任せる。だが計画を狂わせるわけにはいかん、邪魔ならど
んな手を使っても消せ」

「御意」

ヴァンはそこから去ろうとする。

「どちらへ？」

「レプリカのところだ、私は導師探索の任に突かねばならぬ。顔も
出さずに行けばあれがわめくのは必至だ」

「では私も任務に戻ります」

「うむ」

それぞれの思惑が交差する中、聖なる焰の光とそれと全く逆のものが
会合する日は近いようだ。

謁見（後書き）

うーん、もっとピオニーらしさを出したかったんですが。

ヴァンも登場させましたが何か微妙でした。

御意見・御感想・御指摘をお願いします。

もう一人？（前書き）

この小説はできる限りガッツ視点で描いていきます。

ですので彼自身の解釈、（というより作者の解釈）で描く部分が多くなります。

もう一人？

エンゲープはまさに食料の町である。

ここからマルクト、キムラスカに食料がいきわたる。この世界における生命線の一つだ。

そんな町に一行は到着した。国境をすぐにも越えたかったが、追手のことやイオンの体調を考えると、この街でひとまず休む必要がある。

「うほ、人がいっぱいだ」

「食料の町ですからね、国境も近いです。物流があるところは自然と人が集まります」

「ほらイオン様！ あっちになんか面白そうなのがありますよ」

「アニス？ 迷子にならないでくださいね」

「ぶー、子ども扱いしないで下さいよ大佐」

「おや、これは失礼しました」

ガッツ以外はこの街の喧騒と、仲間との会話を楽しんでいた。

「あなたは逆にもう少し楽しんだらどうですか？」

「何を？ 賑やかっつても所詮田舎じゃねえか」

「まあ、イオン様の身を守るならそれくらい仏頂面がいたほうがいかもしれませんか」

ケツ、とガッツは露骨に悪態をつく。

「私はこれから、食料泥棒の被害届を出した村長のところに行きます。あなたはどうしますか？」

「アニス、どこですか、村長さんのところに行きますよ」

イオンが声をあげてアニスを探していた。どうやらさっそく迷子になってしまったようだ。

「そういうわけだから、俺も行つといたほうがいいだろ」

ガッツは少し疲れた声で言った

「はあ、やれやれあんなに言っておいたというのに」

呆れているようだがどこか楽しげだ。

「パック」

ガッツがあたりを見回していたパックを呼ぶ。

「ほいよつ、ちょっと人が多いけど探してくるよ」

パックは言われただけで、自分が何を頼まれるか察したようだ。

「すみませんパック」

申し訳なさそうに言うイオン。

「いいのいいの、じゃあいつてきまゝす」

そう言つてパックは人混みに消えていった。

そして一行はこの村の村長である、ローズの家に向かった。

「ガッツ、ジェイド、僕は被害にあつた食料庫を見てみたいのですが」

「何もお前が犯人探しをしなくてもいいだろ」

ジェイドと並んで歩いてきたガッツがイオンを見て言う。

「でも、」

「まあ問題ないでしょう、私が被害報告を聞けばいいんですから。それにガッツがちゃんと傍にいればいいだけの話ですからねえ」

ジェイドは満面の笑みをガッツに向けてそういった

わーったよ、とガッツは舌打ちしながら答える。どうもこの男は厭味なところが多いようだ。

「すみませんガッツ」

「別にどこにしようがどうでもいいさ。ただあいつに言われると少

しム力つくだけだ」

「そこは我慢してください、一応協力者ですから」

どこかあの男はセルピコに似ている節がある、いつもひょうひょうとした態度をとるところとか、刹那に見せる鋭い眼光もどことなく似ている。

そしてああいうやつほど強さを隠すのがうまいのだ。

「ここですね」

そして食料庫に着いた。

二人は中に入り手掛かりがないかどうか探す。（と言ってもガッツは壁に寄り掛かっているだけだったが）

「……これは」

イオンが何か発見したようだ。

「何かあったのか」

「ええ、チーグルの毛です」

イオンは立ち上がり手に取ったものを見せる。

「なんだそりゃ？ 動物か？」

「ええ、チーグル。ローレライ教団で聖獣とされている動物です」

イオンがうなずきながら答える。

「どうやら食料泥棒の犯人はチーグルのようですね」

ガッツはボリボリと頭を掻き、どうでもいいというような表情だ。

「満足したろ？ さつさと村長のところに戻るぞ」

「そうしましょう」

二人が村長の家へと歩を進めようとした時だった。

「ローズさん！！ 食料泥棒を捕まえたぜ！！」

「俺は泥棒なんかじゃねーつつつのー！！」

騒がしいわめき声が家のほうから聞こえた。

「いけません、誰かが勘違いされたようです」

言うが早いか、イオンは一目散に走り出した。

（やれやれ、これじゃあ休息になりやしねえ）

やれやれといった感じでガッツも遅れて走り出した。

イオン達がついたところには幾分静かになったようだ。

「彼らは漆黒の翼ではないと思いますよ、私が保証します」

ジェイドが村人をなだめているところに、イオンが入って行った。

「それに食料泥棒でもなさそうですね」

中の人間が一斉にイオンを見る。

「少し気になったので食料庫を調べさせてもらいました。そしたら・
・・・」

ガッツも遅れて家の中に入った。

そして一人の少年を見たとき驚愕する。

（アッシュユ!?）

そう、その赤毛の少年は自分が止めを刺そうとしたアッシュユにとて
もよく似ていた、というより同一人物に見えた。

（・・・いや、だが何かが違う）

しかしすぐに違うと判断した、あまりにも動きが違いすぎる。

達人レベルになるとその立ち居ふるまいも違ってくるものだ。

しかし目の前の少年はいくらか剣の心得があるようだが、その実力は
はまだ素人に見える。

だが全くの無関係とも思えない。

そう考えていると、何かが自分にぶつかった。

「いつて~~~~っ！ どこ見てんだよ！！」

自分が気になっていた少年が鎧に鼻からぶつかってしまったようだ。

「ルークがよそ見してるからでしょ、すいません気にしないでください」

「うるせー、こいつが……」

何か喚いているようだったが、ガッツはルークと呼ばれた少年の顔を見入っていた。

「……なっ、なに人のかをじろじろ見てんだよ」

急にでかい態度が消えうせたルーク、実はちよつと怖かった。

「……いや、なんでもねえ。悪かったな」

「ケツ、今度から気をつけろ！！」

そう言つてルークは憤りながらでていった。連れらしき少女はお辞儀をしてルークを追いかけていった。

「ほらほら、あたしはまだ大佐と話すことがあるんだ。」

ローズがそういうと、村の人たちも出て行った。

しかし、直ぐにけたたましくドアを開ける音が鳴り響く。

「イオン様！！」

迷子になっていたアニスが飛びこむように入ってきた。

「アニス、心配しましたよ」

「もうひどいですよう、あたしを置いて行くなんて」

「すみません、パックに探してもらっていたんですが。合わなかったんですか？」

「ほえ？ 会ってませんよ？」

アニスが首をかしげながら言う

「アゝニス、それよりも後ろを見たほうがいいですよ」

「はい？」

アニスが振りかえると、そこには鼻を押さえているガッツがうつろまっていた。

どうやら開いたドアに激しく鼻をぶつけたようだ。

「うわゝあゝ！！ ガッツゴメン！！」

歴戦の狂戦士も痛覚はやはり人並のようだ。

そのころパックはと言つと、

「追え〜！！妖怪栗小僧を捕まえろ〜！！」

「のおおおおおお！ 誰か助けてー！！！！！！」

地元の子供たちに追われていた。

もう一人？（後書き）

やっぱ、毎日更新はきついです。

大学の課題もあるしな。

でもできる限りよいものを、速く書いていきたいと思います。

御意見・御感想をお待ちしております。

めぐり合う炎（前書き）

ここからしばらくは原作沿いです。もっともガッツ視点ですが。

それと、原作とは少し違う展開になるかもしれません。

今家にあったアビスの漫画を見ながら書いてます。

めぐり合う炎

朝、エンゲーブの宿屋。つい2、3時間前にようやく眠りに着いたガッツだったが、いきなりアニスに起こされる。

「イオンがいない？」

「そうだよ！ 今朝起こしに行ったらベットがもぬけの殻で」

「まあまあアニス、そう慌てないで」

慌てているアニスとは逆に、ガッツ、ジェイドの二人は妙に落ち着いていた。

「何言ってるんですか大佐！！　これが慌てずにいられますか！！」

「」

騒ぎ立てるアニス。

だがジェイドは落ち着いた様子で、

「アニス、まだ朝早いですから。そんなに騒ぐと迷惑ですよ」

と少しずれたセリフを言う。

「じゃあジェイドは、イオンがいった場所に心当たりがあるの？」

「」

パックがジェイドに尋ねる。

「ええ、昨日の様子からいって恐らく間違いないでしょう。私とガッツで向かいますから、アニスは別の仕事を頼みます」

「ほえ？　なんですか？」

訳がわからないといった表情でアニスは聞き返す。

「ここから北にある森に、タルタロスを持ってきておいってください」

「そこに、イオン様がいるんですか？」

アニスが声を張り上げる。

「ええ、ですから大急ぎで頼みますよ」

「了解しました」

イオンがいるという言葉に安心したのか、アニスはいつものぶりっ子声で返事をして宿屋から出て行った。

「・・・で、チーグルつてのがそこにいるってわけか」

アニスが出て行ったのを見計らってガッツは尋ねた。

「ええ、やはり気付いてましたか」

ジェイドも口調をまじめに変えていう。

「クソ真面目なあいつが考えそうなことだ」

壁に立てかけてあったドラゴン殺しを背中にしまいながら言う。

「では早く行きましょう、時間が惜しい」

「・・・ああ」

ガッツは昨日の夜整備しておいた装備を身にまとい、ジェイドと共に出発した。

チーグルの森に着いた二人と妖精一匹。

途中の、魔物なども出たがもちろん二人の敵ではない。

「うん確かにイオンはここにいるよ。微かだけど感じる」

パックのセンサーがイオンを捉えたようだ。

「他には何かありませんか？」

「あるよ、ほかに二人」

「やはりそうですか」

思った通りといった表情だ。

「なんで知ってたんだ？」

ガッツが横目で見ながら尋ねる。

「今朝部下から報告がありました。北に向かった男女二人組がいたと。昨日あなたに話しておいた二人です」

そう、昨日ジェイドはガッツに正体不明の第七音素を放出している男女が、昨日のルークと呼ばれた少年とその共の少女であることを話していた。

「その二人を確保するために、あれを呼んだのか」

あれとはもちろんタルタロスのことだ。

「ええ、まあそのまま急いで国境を超えたいということもあります
が」

そう、慎重になりすぎて遅くなってしまっは元も子もない。

特に戦争の問題は一刻を争うのだ。

「あれ？」

パックが何か見つける。

「リンゴだ」

そこには焼き印が施してあるリンゴが落ちていた。

「この焼き印はエンゲープのもですね」

ジェイドが手にとって確かめる。

「じゃあやっぱそのチーグルってやつが盗んだのか」

「解せませんね」

ジェイドはあごに手を当てて考える。

「何がだ？」

「チーグルは草食のおとなしい魔物です。なぜわざわざ町まで来て人間の食料を？」

「さあな、動物特有の事情でもあるんじゃないかねえか？」

ガッツは適当に答える。

「動物特有・・・・・・・・」

しかしその言葉にジェイドは何か引っかかったようだ。

「・・・・パック、イオン様はまだ奥に？」

しばらく考えてジェイドがパックに尋ねる。

「うん、三人ともだいぶ奥にいるよ」

「いきましょう、イオン様と合流しないことには何も・・・・」

そう言ってジェイドとガッツは歩を進める。

しかし奥に進むにつれ、道はどんどん険しくなっていく。

尤も二人は全く答えていないようだった。

そこに唐突に、

『グアアアアアア！！』

何か獣の雄たけびの様な音が聞こえた。

「これはライガの鳴き声！」

ジェイドは一回聴いた出けで何の音か理解した。

「そいつも魔物か？」

「ええ・・・パック！ イオン様はこの先ですか？」

「な、なんかほかにも凶暴なのがいるみたいけど・・・確かにこの先だよ」

パックは雄たけびにビクリながらも答える。

「そうですか、ではガッツ頼みましたよ」

ここでもさかの他人任せ。

「おい、てめーはなんもしない気か」

さすがのガッツもジト目で答える

「ハッハッハ、そういうわけではありませんがライガ相手に肉弾戦はさすがの私でも無理ですよ。ですからまずあなたが」

まあジェイドは譜眼を使って一瞬で強力な譜術を発動できるのだが、彼はまだガッツの戦闘を見たことがない。

そのため、これからのためにも彼の戦いぶりを一応見ておきたかった。

そしてガッツはそのことにすぐに気付いた。

(・・・相変わらず食えない野郎だ)

まあ六神将との戦い依頼、鈍っていた体を動かすにはちょうどいいかもしれない。

ガッツはボウガンを設定して駆け出した。

ルークが剣を構えているその肩は呼吸の粗さを物語っていた。

初めてといっても過言ではない彼の最初の実戦には、ライガ・クインは荷が重すぎたようだ。

しかしそんなことはお構いなく敵は襲いかかる。

「クソッ!!」

何とか回避するだけで精いっぱいだ。

ライガ・クイーンの素早い攻撃。

何とかティアの援護で持つてはいるが、それも時間の問題だろう。

ティアの顔にも焦りと疲労の顔が見て取れる。

彼女自身一時撤退も考えていた。改めて国や教団に訴えれば済む話だ。

しかし撤退を実行するにはもう遅すぎた。

二人とも逃げるほどの体力が残っていない。このままでは本当にライガの餌になってしまう。

「ウワッ!？」

そしてついにルークの剣がはじかれてしまう。

「ルークッ!!」

彼女は駆け寄ろうとしたが間に合わない。

自分の事情で彼を巻き込んでしまったのだ、なんとしても彼を家に送り届けなくてはならない。

そんな思いもむなく、ライガ・クイーンはルークの襲いかかる。

ルークを恐怖のあまり目をつむる。

（師匠えっ！！）

ダダダダン！！

しかし聞こえたのは爪が肉を割く音ではなく、牙が肉を食らう音でもなかった。

そこには地面に突き刺さった矢があった。

「間に合ったな」

そこにいる皆が声のした方向を見る。

そこにはボウガンを構えた黒い剣士がいた。

「あなたは昨日の！！」

ティアが驚いた口調で言う。

『グルルルル！』

一方ライガ・クイーンは距離をとり新たな敵を威嚇する。

「ガッツ！！」

イオンが安堵の声を上げる。

「話は後だ、隠れてろ」

「お、お前、なんでここに」

ルークは尻餅をついた状態で言う。

「下がってる餓鬼、邪魔だ」

ガッツはルークを一瞥せずに言う。

「なっ！　だれが餓鬼だ！！　いきなりでてきて「ルーク！」」

イオンがルークの言葉を遮る。

「ここは、彼に任せましょう」

「イオン様！？」

ティアが声を張り上げる。

普通なら、ライガ・クイーンは何人もの兵士でやっと仕留めつる魔物だ。

譜術もなしで勝てる相手ではない。

「大丈夫です、彼なら」

しかしイオンは落ち着いた表情だ。まるで勝ちがほぼ決まったよう
な言い方ですらある。

そして二人の時間が、一瞬止まった。

それは、剣と言つにはあまりに大きすぎた

大きく、分厚く、重く、そして

大雑把過ぎた

それはまさに鉄塊だった

106

「「な・・・・・・・・」」

常識から逸脱した光景に二人の声が重なり沈黙が訪れる。

鉄塊を構えたガッツと呼ばれた剣士を、食い入るように見る。

「・・・・・・・・あ、あんなもん、ふ、振れるわけねえだろ！」

沈黙を破ったのはルークのしどろもどろとした声だった。

声には出さないがティアも同じ考えであろう。

しかし目の前の剣士は臆することなく悠然としている。

「どうした？ こいよ、すぐに終わらせてやる」

ブワッ！！

その言葉に反応したのか、ライガ・クイーンがガッツに飛びかかる。

バリリッ！！

ガッツの歯を食いしばる音が響く。

ドガアッ！！

勝負は一瞬でついた。

ライガ・クイーンは常識外の大剣で、一振りで一刃両断されてしまったのだ。

ドシャアア！

そしてそこには、先ほどのライガ・クイーンのものとは思えない無残な死体が沈んでいる。

「・・・っ！・・・っ！」

「・・・すい」

ルークはガッツの圧倒的強さに、口をパクパクさせている。

ティアもたまらず感嘆の声を上げる。

パチ、パチ、パチ、

「いやゝ、お見事です。ガッツ」

そしてそこに拍手とともにジェイドが登場する。

「お疲れ！！」

そしてパックも軽〜い感じで登場する。

「うおっ！　なんだあれ！？」

（カワイイ）

ルークはパックに対して驚きの声をあげるが、ティアは隠れて喜んでいた。

「ガッツ、卵の始末もお願いします」

つくづく人使いが荒いと思いながら、ガッツは剣を振りかぶり

ドゴッ！！

卵を粉碎した。

「もう用がねえなら俺は先に戻るぜ」

イオンと何か話しているジェイドに言う。

「ええ、先にアニスと合流しといてください」

そしてガッツはライガの巣を後にした。

その後ろ姿を、ティアとルークは何か信じられないようなものを見るような目で見送った。

めぐり合う炎（後書き）

うーん、もっとガッツの強さを自重したほうがよいだろうか。

その辺の指摘も含めて、御意見・御感想をお待ちしております。

ヒント（前書き）

時間がかかってしまいました。

でもこれだけ時間をかけても私の文章はぐだぐだです。

ヒント

ルークとアッシュ。この二人の関連性を解くことが、自分がこの世界ですべきことの手掛かりになるように思われてならない。

ガッツはタルタロスの自分に宛がわれた部屋で考えていた。

さっきまで捕縛したティアとルークの話を聞いていたのだが、自分が知りたい情報がないと判断しジェイドに断り部屋に戻ったのだ。

「うーん、でも本当にあの二人は同一人物と言ってもおかしくないよ」

先ほどパックに聞いてみたが、彼が二人から感じたものは全く同じものだったらしい。

「前にもそんなことはなかったのか？」

「兄弟や双子で似たようなものを感じることはあったけど、まったく同じなんて初めてだよ」

同一人物ということをもたまた考えたが直ぐに首を振る。

（ルークってやつは本当に何も知らねえお坊ちゃまみたいだしな）

それともう一组ガッツは気になっていた。

（イオンとシンク、今考えてみるとあいつらの声も似すぎだ）

同一人物とも思える者たち。

この謎を速く解明したいが、何分この世界に来て日が浅い。

とにかく情報がほしい。

そう考えている時だった。

ビーツ！！ ビーツ！！

突如警報本が響く。

「なんだ？」

そしてすぐに声が響く。

「前方に無数の魔物の群れを確認、総数は不明、総員直ちに戦闘配備に着け！！」

「魔物？」

どうやら敵が現れたようだ。

（まさかまた敵の妨害か？）

いくら魔物とはいえこれほどの戦艦に襲いかかるとは思えない。

となれば……。

「ガッツ、どうすんの！？」

「なんもしねえ」

「そうか！　ならいますぐ・・・てっええ！？」

バックは今すぐにでもイオン達のところへ行くもんだと思っていたらしく、素っ頓狂な声を上げる。

「どうしてさ！？　助けに行かないと！！」

「どんな相手かもわからねえんだ、それにいまいち中の構造もわからねえ。下手に動かないほうがいい」

至極まっとうな意見だった。

尤もただ部屋の中でボーっとしてるわけにもいかないの、ガッツはドア付近の壁に張り付き外の様子をうかがう。

「ガッツ、聞こえますか？」

そんなときいきなり声が聞こえた。

ガッツがあたりを見回すと。

「ここから声が聞こえるよ」

バックは壁にあった伝声管を見つけた。

「どうした？」

一応ガッツはそれに向かって話す。

「大詠師派の追手のようです」

「さっきの部屋にいるのか？」

「ええ、ですがあなたはそのままブリッジに向かってください。われわれとはそこで合流しましょう」

「どう行けばいい？」

「幸いあなたの部屋のすぐです。敵がいた場合は速やかに排除しておいてください」

ジェイドはガッツにブリッジまでの道を教えると、そのまま切った。そして二人はブリッジまでの道を歩き始めた。

しかしブリッジまで続く外の道には敵が大勢いた。

「どうすんのガッツ？」

「あいつがいったら？ 敵は排除しとけって」

ガッツはボウガンを装着しながら答える。

（さて、おっぱじめるか）

そして不意に物陰から飛び出す。

「な、なんだ！？」

「敵だ！！」

しかし剣を抜く間もなく近くにいた兵士や魔物はボウガンの餌食になる。

ドサ、ドシャア

次々と倒れる兵士や魔物たち。

ある程度敵を減らすと、ガッツはドラゴン殺しを抜く。

まだ圧倒的に敵の数が多いが、剣を構えたガッツは少しも臆していない。

「どうやら、今回は百人斬りと百匹斬りを同時にやんなきゃいけないみてえだな」

そういうとガッツは敵の中に飛び込んだ。

一方ルーク達はイオンとアニスを逃がし、三人になっていた。

しかもその中の最大戦力のジェイドはラルゴによりアンチフォンスロットをかけれてしまっている。

「大佐、大丈夫ですか？」

心配そうにティアが尋ねる。

「ええ、大丈夫です。戦闘に支障をきたしていないと言えば嘘になりますが」

一方ルークのほうは暗い表情だった。

（・・・人を、人を殺した）

そう、先ほどの戦闘で血を、人の死を、本当の戦場を目の当たりにしたのだ。

今まで魔物は何匹か殺してきたが、それとは決定的に違う。

世間知らずのルークには生々しい人間同士の戦いはショックが強すぎた。

「・・・、・・・ク！ルーク！！」

「・・・あ、」

そんなことを考えていたルークにティアが声をかける。

「しっかりして、さっきも言ったとおりあなたも戦力に数えてるのよ」

「わ、わーってるよ！..」

焦りながらも答える。

「静かに！」

そこにジェイドが声をかける。

「この先を越えればブリッジです、どこに敵がいるとも限りません
気を引き締めていきますよ」

そう言つて、外に出ようとするが・・・

「助けてくれえええええ！！」

なんといきなり、一人のオラクルの兵士が飛び込んできた。

「ウワアア！！　な、なんなんだよ」

いきなりのこととで驚いたルーク。

よく見るとその兵士は血みどろだった。

「た、助けてくれええ！！」

「待つて、様子が変だわ」

その兵士に近づくとした瞬間。

ドスッ

「ウゲッ！？」

突如その兵士をなにか大きなものが貫いた。

そしてそのままその兵士は息絶える。

驚いたティアは刺した方向に眼をやる。

そこには馬鹿げた鉄塊を兵士から引き抜くガッツがいた。

「ヒッ！」

いきなりのもので悲鳴をあげてしまう。

「あ、あ、」

一方のルークは先ほど以上の衝撃を受けていた。

それは人の死を目の当たりにしたからではない。

目の前のガッツに対する純粋な恐怖だった。

逆光のせいもあり、ガッツはまるで片目だけが光る黒い大きな影に見える。

しかもよく見ると全身が血に染まっていた。

「……来たか」

しかし当のガッツはそんなことを気にも留めていない。

「速かったですね」

ジェイドのほうは全く驚いていないようだった。

「この先なんだろう？ さつさと行くぞ」

ガッツは血糊を振り払い剣をしまう。

ティアとルークは辺りの光景に愕然とする。回りはまさに血の海と死体の山。

しかも人間だけでなく、ライガやグリフィンも多くみられる。

（これだけの敵をたった一人で？）

（すげえ、けど……）

やはり戦いに、死に慣れていないルークにはまだ若干の恐怖が残っていた。

「あ、あの！」

ティアは前を歩くガッツに声をかける。

「これ、もしよかったら」

そう言って、ティアはハンカチを差し出す。

（血ぐらい拭え、姫様が怖がってる）

ふとガッツはもう何年も前の様な気がする、かつてのキャスカの姿

がフラッシュバックした。

（そうか、またやっちまったんだな）

後ろの二人を見やりガッツは思った。

「……ありがとう」

そう言っただけでガッツはハンカチを受け取り顔についた血を拭き取った。

一方ティアは意外に思った。

ハンカチを差し出した時ダメもとで差し出したのだ。

（意外に……いい人？）

ハンカチを受け取りながらティアは思った。

そして凄絶な光景を目の当たりにしながら一行はブリッジまでついた。

「ここからは私とティアで進みます。お二人はここで見張りを」

ああ、とガッツが短く答える。

ブリッジのドアが閉じると気まずい雰囲気の流れる。

ルークは佇むガッツを恐る恐る見る。

先ほど顔の部分の血を拭き取ってはいたが、来ている漆黒の鎧には

まだあちこちに血がこびり付いている。

（……もしかしたらヴァン師匠よりも強いのかな）

チーグルの森でのことを思い出す。

自分達が全く歯が立たなかったライガ・クイーンを一刀のもとに斬り伏せた光景。

そして目の前に広がる壮絶な光景。

この男は一体どのような生き方をしてきたのだろうか。

「……なあ」

そして勇気を振り絞って声をかける。

「……なんだ？」

「あんたは、いつから剣振ってたんだ？」

「……物心ついたときから俺は戦場にいた。人の死なんか考える余裕もなくな」

「……そう、か」

言葉が続かない。

もっと聞きたいことがあるというのに。

「お前は戦いたいのか？」

「え？」

いきなりで、意外だった。

彼から話しかけてくるとは思わなかったのだ。

「別に戦闘は俺たちに任しときゃいい、わざわざ血なまぐさいところに飛び込む必要なんかないだろう」

「俺は・・・」

そうだ、何故俺は戦うと言ったのだろう。

なぜわざわざ死の嵐に飛び込もうとしたのだろう。

「英雄願望ならやめとけ」

「なっ！！」

「もっと・・・、俺よりも多くの命を奪わなくちゃなんなくなる」

「ルークは考えた。」

俺が殺す？ この目の前の死体の山よりも多くの命を奪う？

やだ、いやだ！ イヤダ！！

「まあ戦う気があるんなら止めはしねえ」

「えっ？」

「戦場に立つて、武器を持ったんなら餓鬼だろうがなんだろうが立派な戦力だ」

「……………」

「戦うんなら腹くくれ、出なきゃ足手まといだ」

何も言えなかった、自分には覚悟がない。

戦争は避けたい、箱入り息子の自分でもその思いはある。

だがそのためには、自分がまず戦わなくてはならない。

そしてそうすれば、自ずと自分は命を奪わなくてはならない。

「人を殺すことが怖いなら剣なんて捨てちまいな！！」

考えていたルークに突如別の声がかかる。

「誰？」

「この出来損ないが！！」

突如頭上から襲いかかる影。

「ちい！」

すかさずガッツはルークを突き飛ばす。

ガギイン！！

ガッツはその攻撃を義手で受け止める。

「さすがだな、よく反応できたもんだ」

「てめえ、アツシュか」

そう、そこには六神将の一人。そして自分が守る存在であるかもしれないアツシュがいた。

それに気づけば周りには新たなオラクルの兵たちがいた。

「クソ！」

ルークは剣を抜く。彼の頭には先ほどのガッツの言葉が残っていた。

- 戦場に立つて、武器を持ったんなら餓鬼だろうがなんだろうが
立派な戦力だ -

（そうだ、俺だって戦えるんだ）

「ウオオオオオオ！！」

ルークは敵に向かって踊りかかる。

敵と鏖ぜり合う音が聞こえるが敵は一人ではない。

「せやあああ！！」

後ろから敵が襲いかかる。

「うわ！！」

何とか受け流し回避するも、敵の数は圧倒的である。

（ガッツだつてあれだけの数を一人で倒したんだ、俺だつて！！）

だがこの考えがまずかった、ルークとガッツの強さは根本的に違うのだ。

直ぐに劣勢に追い込まれる。

（クソ！ やっぱあれだけデカイ剣じゃないとだめなのか？）

ルークはこの時、強さというものを履き違えていた。

武器とは、ただたんに剣のことではない。

強さとは技量だけで推し量れるものではない。

そのことを理解するにはルークは何も知らなすぎた。

「ウワッ！」

そしてついに剣をはじかれてしまう。

「あんの馬鹿!!」

ガッツはすぐさま駆けつけようとするが。

「動くな!!」

敵兵がルークを人質に取る。

「これは一体!？」

騒ぎを聞きつけたジェイドとティアが駆けつける。

「さすがネクロマンサー殿、しぶとくていらっしゃる」

そこには敵に囲まれているガッツと、捕らわれているルークがいた。

「アッシュ、六神将鮮血のアッシュ!!」

そのアッシュを見たジェイドの顔は、何かに気付いた表情だった。

「アッシュ、それまでにしておけ。閣下の御命令を忘れたか」

声のした方向にはリグレットの姿もあった。

「教官!？」

その姿を見たティアは驚きの声を上げる。

「久しいなティア、だが今は慣れあつた時ではない。おい、こいつらを牢に閉じ込めておけ」

「ハッ！」

そして四人は捕縛された。

だがガッツはジェイドがアッシュの顔を見たときの表情を見逃さなかった。

ヒント（後書き）

そういえば今日からまたベルセルクの連載が再開ですな。

なんか原作でもガッツの強さがチーとになってきている気がする。

まあゾッドやグルンベルトを相手にしてきたガッツにはどの敵も力不足は否めませんね。

それでは御意見・御感想をお待ちしておりますノシ

魂（前書き）

ガッツをいれたフェイスチャットを書いてみたいな〜と思う今日この頃です。

魂

牢屋の中。

何故か自分だけが、ほかの三人と別にされてしまったのだ。

（あいつらの助けは期待できねえな）

というのはおそらくジェイドが

「彼は自分で脱出できるでしょう」

と言っただけからだ。

今パックが自分の武器の所在と、牢屋のカギを探索中である。

仮に鍵のありかがわからなくても、幸いオラクルの兵士は義手を取り上げなかった。

もちろん弾が入っている。

だからこそ彼は脱出に関しては心配はしていなかった。

彼が今考えているのは、先ほどのジェイドについてだ。

（さっきのあいつの表情からして、何か思い当たるもんがあるみたい間違いねえな）

ようやく情報らしい情報が手に入りそうだった。

だからこそあいつらと別れたのは少し悔やまれる。

「ズバツと参上！！　ズバツと解決！！　解決「それは前に見た」
なんだよ、のりがわるいな」

目の前には鍵を持った栗妖精がいた。

その栗妖精をガッツはすかさず鷲掴みにする。

「なっなんだよ、ちゃんと武器の場所も確認してきたんだぞ」

「前みてえに生意気な口きかれたらたまねえからな」

「ウゲツ！！」

ガッツはそのままパックが持ってきた鍵で牢屋を出た。

「さつさと装備の場所まで行くぞ」

「あいよ」

そのまま取り上げられた装備を奪い返しに行く。

見張りが一人いたが、

ドゴッ！！

「グハッ！！」

義手の一撃で気絶してもらった。

すべてあるかどうかを確認し、最後にはベヘリットの存在も確認する。

（あるのは俺のもんだけみてえだな）

ガッツは素早く装備を整えると、すぐに行動に移る。

「ねえ、ねえ、みんなは助けないの？」

「ジェイドの野郎がいるから大丈夫だろ」

ガッツはとにかく外に出ようと身を隠しつつ進む。

その時、

「ネクロマンサーの名によって命じる！ 作戦名『骸狩り』 始動せよ！！」

その声と共に室内がいきなり暗くなる。

（・・・この声、あいつか）

「うお！？ なんじゃなんじゃ??」

（これで幾分動きやすくなったな）

暗闇とまではいかない暗さではあるが、常人なら少し不便さを感じるであろう暗がりになった。

闇の中で戦ってきたガッツには無意味だが。

「でもこれからどうすんの？」

「とりあえず外に出る」

幸い兵士の数も少ないようだ。（尤もその数を減らしたのはほかならぬガッツだが・・・）

（とりあえず、ブリッジとやらのとこまでいくか・・・ 確かここから近いはずだ）

ガッツは先ほどの場所を目指して歩を進める。

だが・・・

「ガッツ、ここ開かないよ」

そう、ここを越えれば先ほどの場所に出られるはずなのだが。

先ほどまでなかった硬い壁が出現していた。

先ほどのジェイドにより発動された非常停止機構により隔壁が作動していた。

しばらく考えるガッツ、

（これしかねえか・・・）

観念した様子で義手を近くの壁に向ける。

「でもそれで出られなかったらどうするの？」

「・・・壊れなくても少しくらい柔くなんだろ」

ガッツはその言葉の後、義手のひもを引いた。

一方外では。

「さあ、武器を捨ててタルタロスに戻ってもらいましょうか」

ジェイド達がリグレットをはじめとするオラクル兵たちを捕縛していた。

アリエッタを人質に取られたリグレットは仕方なくジェイドの言葉に従う。

「大丈夫か？ ルーク」

先ほど華麗に皆を助けたガイがルークに近寄る。

「あ、ああ・・・」

気のない返事をしながら、ルークは傍らに転がる兵士を見る。

大量の血が自分がさした剣からあふれ出ている。

（英雄願望ならやめとけ）

（もつと……俺よりも多くの命を奪わなくちゃなんなくなる）

（お前は……英雄となるのだ、ルーク！）

以前ヴァンに言われた言葉と、先ほどのガッツの言葉が頭の中を駆け巡る。

「ルーク、大丈夫？」

ティアも心配そうにルークに近寄る。

「こんなことが、外ではいつぱい起こってたのか……」

自分の知らなかった世界、

そして何も知らずに憧れてた英雄……

（こんな思いをしなきゃ、皆に認められねえのか？）

英雄や認められるということは、ルークにとって呪縛と言ってもいいものだった。

記憶をなくす以前の自分のことしか認めない周囲。

そして周囲に認められる英雄になれというヴァンの言葉。

（俺は……どうすれば）

「ルーク！ 今は一刻を争います。速くここからはなれますよ」

無情ではあるがジェイドの言う通りだ。

親書を届ける為に、新たな妨害が入る前に急がなければならない。

「ジェイド、ガッツは・・・」

「彼も一流の戦士です。それはイオン様が一番わかっているでしょう」

ガッツの心配をするイオン、しかしいつかの様に待てるほど時間もない。

「すみません」

その時だった、

ドッゴオン！！！！

すさまじい爆音が響いた。

「なんだ！」

「新手か！？」

音の下方向を見るとす様じい爆発が起きたように、タルタロスに穴が開いていた。

ルーク以外の全員が身構える。

「うんしょっと、やつとお天道様が拝めるね」

そんな緊張感をよそに出てきたのはパックだった。

「あり？　なんだ皆・・・でもないけど、だいたいいるじゃん。お
ううい」

「パック！！」

「ということは」

その穴からガッツの姿が現れる。

「やはり無事でしたか」

「ガッツ！！」

飛び降りたガッツに駆け寄るイオン達。

「よう、生きてたか」

「この人は？」

初対面であるガイが尋ねる。

「彼はガッツ、僕が雇った傭兵です」

「そして俺はパック」

「ほお、妖精か、初めて見た」

意外とガイは驚かなかった。

皆が駆け寄る中、ルークはまだ一人後ろで俯いていた。

ガッツはルークの傍らにある死体を見た。

(・・・成程)

ガッツはルークに近ず居ていく。

「・・・よっ」

「あ・・・ガッツ」

そう言つてルークは何とか立ち上がった。

「いろいろあるだろうが今は急がなきゃなんねえ、わかるな？」

ルークは無言でうなずいた。

「それでは急ぎましょう、夜までにできるだけ国境に近ず来たい」

その言葉と共に一行はタルタロスを離れて行った。

その途中ガイがガッツに話しかけてきた。

「随分家のルークが世話になったみたいだな」

「お前は？」

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺はガイ、ガイ・セシルだ。簡単にいえば使用人だ」

「そうか、だが別に俺はあいつに大したことはしちやいねえよ」

「なら余ほどインパクトがあつたんだな、あのルークがあれば他人の言葉を聞くななんて珍しいからな」

「買被りだ」

「まあ、これからよろしく頼むぜ。ガッツ」

そう言つて、前にいるルークを慰めに行く。

（ここならきつと見つかるぜ。おまえさんの居場所がさ）

（ジュード・・・）

ガイを見ているとかつての黄金時代の一遍が、淡い灯火のように現れた。

まるで彼の魂が、この世界で生きていたような感覚だった。

魂（後書き）

私はすぐに、ベルセルクのキャラと重ねてしまいます。

これはないだろうというものがあつたら指摘してください。

御意見・御感想をお待ちしております。

恐怖と復讐（前書き）

難産でした。

でもやっぱり私の文章はぐだぐだです。

恐怖と復讐

小高い丘でガッツは武器の手入れをしている。

辺りは日が落ち、振り返れば焚火の光だけが少し離れたところにある。

この世界に来てしばらく経つが、相変わらず亡者どもは出ない。

だが眠れない、故にしばらくは自分が夜のあいだの見張り役だ。

ジェイドも、

「いやあ助かります」

と言つて見張り役をガッツに押し付けた。

亡者が出ない理由は相変わらずわからないが、出ないに越したことはない。

焚火のほつを見やるとルーク達が眠っている。

先ほどまでミュウと戯れていたパックも既に眠りにについている。

夜の間、あんな風に眠れたのがもうずいぶん前の様な気がする。

そこまで考えてハツとする。

どうもこの世界に来てから考え事が多い。

とにかく元の世界に帰ることを考えなくては。

そのためにも、まずジェイドから聞かなければならないことがある。

（尤も、知っててもあいつが素直にしゃべるとは思えねえけどな）

少し厄介だなと思うと後ろに気配を感じる、

「……音を殺して後ろに立たないでくれるか」

「えっ」

「長年の癖でな、少し焦っちゃうんだ」

そこにいたのはティアだった。

その言葉を受けて、ティアはおずおずとガッツの隣に行く。

「武器の……整備をしてたんですか」

「……ああ」

ガッツは黙々と作業を続ける。

「……座らねえのか？」

「えっ……じ、じゃあ失礼します」

またもおずおずしながらそのまま腰を下ろす。

ティアは後ろに横たわる鉄塊を見る。

（かなり使いこんでいるのね……）

血錆、刃こぼれ、傷。

一体どれほど振り続けられこうまでなるのか。

昼間の光景を思い浮かべる。

戦っているところを見たわけではないが、あれだけの数をつたった一人で殲滅してしまった。

しかも譜術師ではない剣士が。

「……昼間ありがとうよ」

「えっ」

唐突に礼を言われまたもや声をあげてしまう。

「ハンカチさ」

「あ、ああ、そんな……お礼を言われるほどでは」

ティアは手を振りながら答える。

「……あの、見張り交代しましょうか？」

「あいつも言ってたろ、任しとけばいい」

日が落ちる前のガッツとジェイドの会話を思い出す。

「どうして、眠れないんですか？」

ガッツの横顔をのしながら尋ねる。

ガッツは作業を止め、しばらく闇を見て答えた

「……闇が、……恐れからさ」

ティアはその言葉に驚いた表情をする。

そしてすぐクスツと笑う。

「……なんだよ、おかしいか？」

「あ、すいません。……ただ、あなたにも怖いものがあるんだなあと。そう思ったら、なんか親近感がわきました」

折っていた足を前に出しながら答える。

そんなティアを見てガッツもフツと笑った。

「まあ、確かに柄じゃねえな」

そう言って空を見上げる。

（よかった、けっこう普通の人だわ）

そんなガッツを見ながらティアは思った。

「恐いから……、だから俺は戦った」

「……恐いから？」

「ああ……、戦って、戦って、恐怖を殺意で染め上げた」

そう言った時、ガッツの顔には先ほどの笑みはなくなっていた。

「そうしてるうちに……気付けばこうなってた」

異世界から来たことを抜いても、ガッツの人生は異常と呼べるものだろう。

人外の者たちとの壮絶な戦いは、ガッツの強さを人間のまま人外のものへと進めていたのだ。

そんなガッツを見ていたら、ふと武器の中に紛れているものを見つける。

（……何かしら？）

大きさも形も卵並みのそれを手に取ってみる。

「うっ！」

思わず口に手をあててしまう。

（な、なんなのこれ……）

ベヘリットを見て絶句してしまうティア。

しばらく見ていると、無秩序に配置された目がティアを見た。

「キャッ！！」

いきなり目を向けられ、思わず手放す。

「な、なんなんですか？ これ……？」

恐る恐る尋ねる。

「……俺の……復讐の道標さ」

ガッツは静かに言い放つ。

「……復讐？」

ああ、とだけ答えガッツはまた手を動かし始める。

ティアもガッツの並々ならぬ様子に、それ以上聞くことはできなかった。

手放したベヘリットは相変わらず目をこちらに向けたままだった。

（なんだか呪われそう……）

「生きてるぜ、そいつは」

「えっ！」

ティアの表情はさらに強張った。

「安心しな、そいつ自体はなんの力もない。貝みたいなもんさ」

まるで心と呼んでいるかのように答えるガッツ。

だがその言葉にティアは胸をなでおろす。

「……なんだか、あまり持っていないほうがいいような気がします」
自分が思ったことを口にする。

「……俺も、そう思っぜ」

「……なのに持っているのは、復讐のため？」

「ああ」

一体どんな相手なのだろう、それほどまでに復讐心を燃やすその相手は。

これほどまでに、傷だらけになってまで復讐したい相手は。

「もう寝ろ、……明日も早い」

「……はい」

ティアはガッツの言葉に素直に従った。

これ以上彼は話さないと思ってたからだ。

でもいつか聞いてみたい、何と戦うのか、なんのための復讐なのか。

それを聞けば、彼の強さが見える気がしたからだ。

恐怖と復讐（後書き）

ガッツってもてるんですね。

まあティアとそんなことはありません……多分

御意見・御感想をお待ちしております。

剣と覚悟（前書き）

このあいだ、撮っておいたアビスのアニメを発見しました。

これを使いながら書いていきます。

ですのでミュウが空を飛べます。

剣と覚悟

翌日。

皆が目覚め、出発の準備を進めていた。

しかしルーク一人だけが、ただ何か考え事しているように俯いていた。

「ルーク、お前も準備しとけよ」

「……」

「ルーク？」

「…え？ あ、ああそうだな」

ガイに呼びかけられ、ルークはやつと準備を始めた。

しかしその最中も、彼は何か考えているようだった。

「いいか、ミュウ、師匠が言ったことを忘れるなよ」

「はいですの！！」

「ようし、じゃあ昨日言ったことを思い出してみろ」

「解ったですの！！」

（なにやってんだこいつら）

ガッツは昨晚に引き続き、じゃれついている二匹を見て呆れていた。

（カ、カワイイ？）

一方で和んでいる者もいるが。

「それでは出発しましょう」

一行の出発の準備が整ったことを見計らい、ジェイドが声をかける。

「イオン様とルークを中心に置いて隊列を組みます。先頭は「待つてくれ！」……どうしましたルーク」

自分の言葉を遮ったルークに、振り返り尋ねる。

「……俺も……戦う」

その言葉に、ジェイドは少し肩をすくめる。

「ルーク…無理しなくていいのよ」

昨日のことを考えて、ティアがルークを諭す。

「そうだが、昨日のことみたいなことがまた起きるとも限らないんだ」

ガイも自分の親友であるルークに無理はしてほしくなかった。

「確かに、恐れよ……だけど！ 隠れてるんだったら、なんで俺は戦場で剣を持ってるんだよ！」

そう言つてルークは剣を前に突き出す。

「戦わないんだったら、なんで俺はヴァン師匠に剣を習ったんだよ！」

「ルーク……」

「足手まといにならないようする、だから……俺も、戦わせてくれ！」

その眼は、決意をした者の眼だった。

「……俺からも頼む」

「ガイ……」

いきなりルークを弁護したガイに、ティアが驚く。

「ティア、お前がルークを戦わせたくない気持ちもわかる。責任を感じてるんだろう？」

「あ……あたりまえでしょう！ 私のせいで「だがルークがここまで自分の気持ちを正直に言ったことはなかったんだ。俺はルークのその決意を尊重してやりたい」

そう言われると何も言えなくなる。

「……いいじゃねえか」

「ガッツさんまで!!」

遂にはガッツまでもが賛成してしまった。

「そんな無責任なこと言わないでください！」

「責任なんてもん、戦場にはねえ」

そう、自分の命は自分で掴み取るのが戦場なのだ。

「第一イオンを守るのも一苦労なんだ、自分の身を守るに越したこたあねえ」

「それは…そうですけど」

会話の中、沈黙していたジェイドがルークに歩み寄る。

「……解りました」

「ジェイド…」

「あなたの覚悟を、見せてもらいますよ」

「……ああ！」

そうして一行は一刻も早く、国境を越えるべく出発した。

「で、そのアニスって子が先に行つてて、親書も持つてるってわけか」

「ええ、ですから一刻も早く合流しなければ」

そつ、国境を越えるとともにアニスとも合流せねばならない

「でも大丈夫なのか？ 女の子一人で」

「大丈夫ですよ、アニスですから」

「ええ、アニスですから」

「まあ大丈夫だろ」

ジェイド、イオン、ガッツがまるで心配ないといった反応をする。

（この三人にここまで言わせるとは…）

そつしてるうちに検問所が見えてくる。

「ですから、証明書も旅券もなくしちゃったんです」

そこにはなにやら兵士と揉めている少女の後ろ姿が見えた。

「それではお通しすることはできません」

「はう」

溜息と共にアニスはあきらめ引き返すが

「月夜ばかりと思うなよ」

裏の一部を見せながら小声でつぶやく。

「アニス、ルークに聞こえますよ」

イオンがそう言われ、アニスは顔を上げる。

「きゃわ〜ん、アニスの王子様」

再びいつもの表情を見せ、ルークに抱きつく。

（よくもまあ）

ガッツはアニスの行為に呆れるを通り越して感心していた。

「アニス、お取り込み中の所すみませんが親書は？」

「あ、大佐〜もちろん無事です。ホラ」

ルークに抱きついていたアニスは、隠し持っていた親書を見せる。

しかし問題があった。

「どうやって検問を越えましょう、私とルークも旅券がありません」

そう、超振動で飛ばされた二人には検問を越えるすべがない。

「いや、大丈夫みたいだ」

しかしガイの言葉で一気に解決する。

ガイの視線の先には、一人の男が検問を越えてこちらに近づいてきている。

「ヴァン師匠！！」

その男が誰なのか確認できたルークは、喜びのあまり駆け寄ろうとするが

「ヴァン！！」

突如ティアが武器を構え身構える。

「ティア、武器を納めなさい」

「ここで目立つ行動は困ります、ティア」

ジェイドの言葉により、この場は抑える。

ティアが落ち着いたのを確認し、ヴァンは一向に近づいた。

「ティア、お前は誤解をしているのだ」

「何を誤解しているというの……」

「落ち着きなさい、私も今の状況を把握し兼ねているのだ。イオン様がどのような経緯でここにおられるのかも聞きたい」

「すみませんヴァン、とりあえず話しあえるところへ行きましょう」

イオンのその言葉により、一行は検問所に備え付けてある休憩所へと移動することになった。

「なんか複雑な事情があるみたいだね」

「みゆう、さっきのティアさん恐かったですの」

バックとミュウは飛びながら一行に続いた。

「またもガッツは一人でいた。」

「なぜならめんどくさいことは御免だからだ。」

「まさか、あの二人が兄妹だったとはねえ」

血の繋がった家族の命を狙う。

二人がどういう兄妹だったかは知らないし、ティアがどういう心境かもわからない。

だが自分も正当防衛とはいえ、育ての親を殺した。

……お前は死ぬべきだったんだよ……

ガンビーノは死ぬ間際そう言った。

だが今となつては、ただの記憶でしかなくなっていることにガッツは気付いた。

何故かはわからない、自分を必要としてくれた仲間達がいたからだろうか。

愛する存在がいるからだろうか。

そう思っていると、ルークとヴァンの関係が嘗ての自分とガンビーノに重なった。

子犬が主人に懐くように、ルークはヴァンに懐いている。

それが何か裏があるように感じてならない。

もしルークがアッシュのように『彼ら』のうちの一人なら、ヴァンはなんなのだろう。

ただの師匠なのか、それとも……

「ガッツ、パック終わったぜ」

中からガイが出てくる。

「ああ……で、どうすんだ」

「検問所のことなら心配なくなった、このまま国境を越える」

そのうち準備ができた他の者たちも出てきた。

軍港で船に乗るべく、一行は出発した。

剣と覚悟（後書き）

あまり進展しませんでした。

しばらくまだベルセルクの要素はガッツだけです。

御意見・御感想をお待ちしています。

同じ者達（前書き）

長く書くこととして、かなり時間がかかってしまいました。

今回も何か無理やりな感じですが。

同じ者達

一行は軍港へと到着した。

したのだが……。

「どうなつてんだよ……」

その声は誰のものだったか。

そこには壮絶な光景が広がっていた。

いたるところから煙が上がり、地面には死傷者が転がっている。

「これも大詠師派の妨害か」

「そう考えるのが妥当ですね」

「ひどい……」

全員があたりの光景に各々の言葉を漏らす。

「生存者を捜さねば、それに船の状況も調べる必要がある！」

だが調べるまでもなかった。

目の前にある船は、どう考えても航行できる状況ではなかった。

「獣だ」

死体を調べていたガッツがいう。

「獣？」

「ああ、こいつはかみ殺されてて、あつちの奴は爪みたいなので切り裂かれてる」

「じゃあまさか、根暗ツタ！？」

アニスがそう言った途端、空から何か羽ばたく音がした。

「違うもん、アリエッタ根暗じゃないもん！！」

眼を向けると、そこにはグリフィンに乗った少女がいた。

「アリエッタ！！ だれの指示でこんなことをしている！！」

「総長……！ごめんなさい」

そしてグリフィンの足には、人が捕まっていた。

「この技師さんを返してほしければ、ルークとイオン様を連れてコラル城まで来い、です。キャア！！」

いきなり飛んできた矢に、アリエッタが悲鳴を上げる。

皆が振りかえると、そこには義手をかざしてアリエッタを狙うガッツがいた。

（チッ！ すばしっこいな）

カチン、と音がして弾切れを告げる。

すかさず矢を込める。

しかしアリエッタを既に遠くへと飛び去っていた。

とりあえず一行は軍港にあった会議室に集まった。

しかし現在の状況では、とるべき行動は限られている。

しかしだからと言って、みすみす相手の言う通りに動くこともできない。

「コーラル城へは行かざるをえまい、技師がいなければ船を出すことは出来ぬ」

ヴァンが今の状況を把握するように言う。

「しかし、イオン様とルークを連れていくことには賛成できません」

「確かにその通り、みすみす相手の言葉に乗るのは危険だ」

「じゃあどうするんですか師匠」

自分が相手の対象になっていることが不安なのか、ルークがすぎるような表情で問う。

ヴァンが眼をつむって考える、そして

「ここは、私が部下を連れていく。もともと六神将は私の部下、私が始末をつけねばなるまい」

「ま、それが妥当だな」

ガッツはそう言うと、奥の仮眠室へと言った。

「ガッツ」

「一応俺も人間なんでな、何かあったら起こしてくれ」

イオンにそう言って、彼はドアを閉めた。

「……本当にあいつに任すの？」

パックがガッツに問いかける。

「言ってたろ、あいつの部下なんだ。あいつが始末をつけねばいいさ」

ガッツはそう言うと剣を立てかけ、ベッドに腰をおろし眼をつむった。

ドアを開ける音で、ガッツは目を覚ました。

「ガッツ、コーラル城へ行くことになりました」

ドアを開けたイオンがそう言い放つ。

ガッツは溜息をすると立ち上がり、立てかけてあった剣を背中にしまった。

「……何も言わないんですか？」

「クソ真面目なお前のことだ、こうなると思ってたよ」

「ガッツ……ありがとうございます」

そう言って、二人は仮眠室を出た。

「みなさん、ガッツも行ってくれるそうです」

他のものは既に準備を終えていたようだ。

「いやゝ助かります、現在この中で最高戦力はあなたですからね」

いつもの含みのある笑みをするジェイド。

「いってろ」

ボリボリと首筋を掻きながら答える。

「じゃあ出発しよう、丁度ここから東の方角だ」

ガイの言葉に一行が出発する。

しかしルーク一人だけが、不安なのか雰囲気陰っている。

「……お前は残るか？」

ルークがハツとしてガッツを見る。

「……前にも言っただろ、無理する必要はねえ」

「い、行くに決まってるだろ!!」

「……そうか」

しかし、彼の眼には不安の色がありありと出ていた。

「……、コーラル城」

「……なんだか」

「陰気な感じだな」

そう、ファブレ家の別荘であつたらしいが、今その見た目はただ不

気味なだけだった。

「とにかく行ってみましょう」

ジェイドの言葉により、一行は中へと乗り込んでいく。

中は思った通りに暗かった。

暗かったのだが……

「やけにきれいだな」

「……ここが、俺が発見された場所か」

「まあもう少し奥だけだな」

そう、ここは誘拐されたルークが発見された場所。

ルークが来たのは、記憶を取り戻す手掛かりが何かあるかと思ってきたのも理由の一つだ。

「でもしっかりした造りになってますね、立派だし、さすがルーク様です」

「おい、ひつつくなよ」

「お、お熱いことで」

「お前に押し付けるぞ、ガイ」

「そ、それは勘弁してくれ」

その時だった、

「うわあああああ！！」

突如ルークの体が宙に浮く。

ルークはグルフィンに驚掴みにされ、あっという間に連れ去られてしまった。

「ルーク！！」

「ルーク様あ！！」

しかしすでに闇へと逃げ込んでいた。

しかしガッツはハアとため息をつく、上へと上がる階段をのぼりはじめた。

「ちょっとガッツ」

あまりにも冷たい反応にガイが呼び止める。

「ここであうだしてても変わんねえだろ、さっさと探索しつぐしたほうが速え」

あまりにも冷たいが正論だ、ルークを一刻も早く探さねばならない。

「彼の言う通りです。ルークが無事であることを祈りましょう」

「音素振動まで同じとはねえ……これは完璧な存在ですよ」

「そんなことはどうでもいいよ、速く引き払ったほうがいい」

さらわれたルークはディストとシンクによつて、謎の音機関に寝かされていた。

(……ここは、一体……)

「こつちのバカもお目覚めのようだよ」

「では私は失礼させていただきます。速くこのデータをかいせきしたいのでねえ」

ディストはそのまま飛び去っていく。

「お……前ら、い……一体」

「答えてやる義理はないね」

その時、何かが走ってくる音がした。

「くっ……!!」

気配を読み取り、すかさず回避行動をとるシンク。

わずかの差で襲いかかる鉄塊。

そこには斬りかかったガッツがいた。

「しまった!!」

その拍子で、ディスクとシンクの仮面が落ちる。

その顔を見たガッツはハッとする。

「てめえ、やはり……」

その言葉にシンクが咄嗟に顔を隠す。

「ガッツ!!」

さらに遅れて他の者が追いついてきた。

「まずい、奴との接触は禁じられている」

そう言つと、素早い動きで彼は逃げ去った。

「いきなり走り出すんだもん、びっくりしたよ」

アニスはガッツに文句を垂れる。

「それよりも、愛しのお坊ちゃまの心配でもしたらどうだ」

「はうあ! ルーク様へご無事ですか」

その様子を見て、やれやれと呆れるガッツ。

「これは!？」

一方でジェイドはこの音機関をみて驚愕の声を上げる。

「あんた、これ知ってんのか？」

ジェイドは落ちていた音素盤を拾う。

「……いえ、まだ結論は出ません。確信が持てないと……」

ジェイドの表情はいつになく曇っていた。

「……いや、確信が持てたとしても」

そしてその表情をガッツは確信めいた顔で見ていた。

だがルークを救出して終わりではない。

船を修理できる技師を、助け出さなければならぬのだ。

そのためにはまずアリエッタを探す。

そのために一行は、まだ探索していない屋上にたどりついた。

そしてそこには、

「待ちかねたです」

思った通り、アリエッタがいた。

さらに回りには多くの魔物が控えている

「技師さんを返してほしければ、イオン様を渡してくださいです」

「アリエッタ、どうか話を聞いてください」

イオンが必死に訴えるが、アリエッタの意志は変わらない。

「話を聞く気はないようですね」

全員が臨戦態勢に入る。

「……アナタ、アリエッタのママを殺した」

そう言つてアリエッタはガッツを指さす。

「あん？」

しかし彼には身に覚えがない。

といつてもこの世界でもオラクルの兵士を多く殺したが。

「俺が殺した兵士にでもいたのか？」

ガッツは剣を構えながら問う。

「チーグルの森でのこと、忘れたとは言わせない」

ますます意味不明だった。あの森で倒したのは……

「まさか、彼女は人間だ」

ジェイドは、ガッツがライガクインを倒したことを思い出す。

「彼女はホド戦争で両親を亡くし、魔物に育てられたんです」

ガッツもようやく合点がいった。

（成程、つまり俺は……）

復讐の対象……。

彼女にとって、今の自分はガッツにとってのグリフィスと同じなのだ。

「ママは、アリエッタの弟や妹を育てただけなのに」

だからこそ、彼女の心が痛いほどよくわかる。

ガッツは無言で前に出た。

解るからこそ、俺がグリフィスに望んだように、相手をしてやろうとガッツは思った。

「ガッツ……」

「……俺だけで、やる」

「なっ」

「ちょ、ちょっとガッツ」

ガッツの言葉に何人かが、声を上げる。

その中で、ティアだけがガッツの気持ちを少し理解できた。

(……復讐)

その言葉が、今の彼にあの言葉を吐かせたのだ。

「……ここは、手を出さないでおきましょう」

「ジェイド……」

「今の彼女は復讐に取りつかれている、ガッツもそれをわかっているようです」

ジェイドはそういつて武器を納める。

その言葉に観念したのか、他の者たちも下がる。

ガッツとアリエッタだけが対峙していた。

「ママの敵!!」

アリエッタが合図を送ると、一気に魔物が襲いかかる。

普通ならば避けるだけで精一杯だが、ガッツは臆することなく剣を振りぬく。

「……………すげえ」

初めてガッツの戦闘を見たガイが驚きの声を上げる。

襲いかかってきた魔物たちが無残に転がる。

さらに上空から隙を狙ってグリフィンが襲いかかる。

鋭い嘴がガッツの顔を貫く。

しかし貫いてはいなかった、

「口で、止めてる……………」

そう、ガッツは顎の力であの鋭い攻撃を止めていた。

観戦していたルーク達は、ガッツの並はずれた反射神経と度胸に度肝を抜かれた。

（普通かわすだろ……………）

（……………顎つよっ）

そのままガッツは、首を押さえ

『ボキヤ！！』

折った。

しかし、これで終わりではない。

他の魔物もいるうえ、後ろで詠唱していたアリエッタの譜術が発動した。

「リミテッド！！」

譜術がガッツを襲う。

「まずい！！」

「諸に食らったぞ」

譜術による煙がはれていく。

そこには一同の予想とは違い、立っているガッツがいた。

食らった時と同様、力強い眼で敵を見据えている。

「まだです！！」

しかしアリエッタは続けて譜術を放つ

しかし何度受けてもガッツはダメージを受けながらも、立っていた。

「効いてないのか？」

「いえ、ガッツはダメージを受けています」

確かに頭から血が流れているのが見える。

『ビチャ』

加えて、口からも血を吐き出す。

「どうやら、我々は思い違いをしていたようですね」

「思い違い？」

ジエイドの言葉にティアが聞き返す。

「彼の一番の武器は数多くの武器でも、あの馬鹿げた大剣でもない」

「並はずれた打たれ強さです」

ガッツは一気に攻めに転ずる、その殺気に魔物たちも怯えていた。

ドガッ！！

アリエッタを囲うように構えていた魔物たちは一気に吹き飛んだ。

「あ…ああ」

アリエッタも怯えた声しか出せなかった。

今の彼女は仲間達を倒された憎しみも、母親を殺された悲しみも、すべてが恐怖に染まっていた。

「……それで終わりか？」

不意にガッツが声をかける。

「え……」

「お前の復讐心ってやつは、それで終わりか？」

その言葉に、アリエッタはへたり込んだ。

「う…うう、うあああああ」

そして泣き崩れた、一瞬でも恐怖に染まりきってしまった自分が悔しくてしょうがなかった。

ガッツはそれを見て、武器を納める。

「アリエッタ！」

アリエッタを見かねたイオンが駆け寄っていく。

「うう…う、うう」

泣きじゃくるアリエッタをイオンはなんとかだめよつとする。

「あきらめないから!!」

「アリエッタ！」

「いつか……いつか絶対殺してやる!!」

「ああ……いつでも来な、待ってるぜ」

ガッツはそう言って背中を向ける。

「ガッツさ……!!」

ガッツに駆け寄ったティアは言葉を失った。

彼が本当に、本当に悲しげな顔をして、涙を流していたからだ。

マントで顔を覆い、黒い剣士は階段を下りて行った。

バックは、今のガッツの悲しみがよく理解できた。

同じ者達（後書き）

バックはよくわかっていると思います。テレジアのこともあつたし。

メインキャラの戦闘描写がほとんどないな

御意見・御感想をお待ちしております。

人の過去（前書き）

今回は超短いです。

すみません。

人の過去

「何か御用ですか？」

一行が無事に技師を助け出し、船が出港して落ち着いた時だった。

ガッツはパックと共にジェイドの部屋を訪れていた。

「あんたに聞きてえことがある」

「……それは珍しい」

すました顔で応答しているが、ジェイドは何か感づいていたようだった。

「……ルークとアッシュのことだ」

「……いつか聞かれると思っていましたよ、あなただけが何か違和感を私に対して持っていた」

「やっぱなんか知ってんな……」

「……ええ」

「……話せるか？ 今の俺に」

「どの道あなたには速くに話そうと思っていたところですよ……」

そう言ってジェイドは立ち上がった。

「しかしまだ、確固たる証拠がありません。ですから、まだ憶測の域を出ていない」

「構わねえよ、話してくれ」

「さて、何から話すべきか」

ジェイドはガッツにフォミクリーについての説明をした。

その理論を構築したいきさつまでも。

そして恐らく、ルークがアッシュのレプリカであることも。

「何故ルークがレプリカだって言えんだ？ 逆かもしれねえだろ？」
「」

「彼の頭髪です、アッシュは真紅に染まっていたのに対して、ルークは先端の色が薄れていた」

「だからなんだってんだ？」
「」

「レプリカはオリジナルに対して劣化している部分があります。おそらく、彼らの場合は……」

「成程な」

それに思い返してみれば、アッシュの憎悪がルークに向けられていたような気がする。

「随分とえげつねえな」

「それは褒め言葉として受け取っておきますよ」

「……あんだ、まだやろうとしてんのか？」

「なにをです？」

「あんだの恩師を、レプリカで復活させようとしてんのかってことだ」

「……まさか、私はただ許しを請いたいのですよ。彼女に対して」

「……悪かったな。辛いもん思い出させちまったみたいで」

ジェイドはいきなりガッツの額に手を当て、自分のと比べていた。

「……なんだよ？」

「うーん、風邪ではないようですねえ」

「てめえ……」

「ハッハッハッハッハ！ 冗談ですよ、それに言ったでしょう？ あなたには話しておきたかったと」

「なんでだ？」

「まあ、あなたが何か私に対して疑っていたというのもありますが……あなたもなにか過去を悔いている、そんな気がしました」

その言葉にガッツはハッとした。

「安心してください、私は聞く気はありません今のところは」

その言葉にガッツは釈然としなかったが、聞きたいことは聞けたので部屋を出ようと立ち上がった。

「……ただ」

ガッツはその言葉に立ち止まった。

「……一つだけ、いいですか？」

「……なんだ？」

「なぜ、あなたはアリエッタと一対一で勝負したのですか？」

ガッツはそう聞かれ、振り返った。

「同情とは少し違いますね、……なにか、自分を初めて客観的に見たような「俺のことを聞く気がないんなら、それ以上何も言つな」……解りました」

ガッツは再び背を向けた。

「まだ時間があります。よく休んでおいてください」

ジェイドのその言葉を聞いて、ガッツは自分の部屋へと足を進めた。

その時、ジェイドの部屋から出ていくガッツをヴァンが見ていた。

人の過去（後書き）

ジエイドとガッツの会話は書いてて面白いです。

結構飛ばしている部分がありますが、作者の文才が足りないゆえです。

申し訳ありません。

御意見・御感想をお待ちしております

動き出す者たち（前書き）

えらく時間がかかってしまいました。

でもだからといって長いわけではありません。

その上一気に話が飛んでしまいました。

突っ込みどころが多い作者ですがよろしく願います

動き出す者たち

ガッツは一度来たことがあるバチカルだが、昇降機で上へとくるのはこれが初めてである。

国王へ親書を渡し終えたイオン、アニス、ガッツのダート組は、宿屋へと向かっていた。

国の配慮でかなり豪華な宿屋へと。

「お前ら、こんなところに泊ったのか……」

前回来た時、ガッツの部屋は取られていなかったため下の安宿に泊まったのだ。

しかし今回はきちんと三人分取られているため、しかたなくこちらに来たのだ。

「貧乏が身にしみちゃってるのはあまり良くないよガッツ」

「かといって、金持ちに尻尾振るのもどうかと思うがな」

「ブー、いいじゃん、玉の輿狙ったって。でも、もう婚約者居るんだよね、ルーク様には」

「でもさ、金持ちの人っていっぱい女の人持つてるんじゃないの？」
「」

「そうか！ まだ側室と言う手があった！」
「」

だんだんと進展していくパックとアニスの話しについていけなくなり、ガッツはイオンのもとへ行った。

「もうこれでいいのか？」

「一応親書は届けましたし、キムラスカの対応待つだけです」

「そうか……」

「ガッツ、ありがとうございます。改めて礼を言います」

「……別にいいさ。いったる、雇い主のあんたに言われたとおりに俺はやっただけだ」

「それでもです。どうですか？ 正式にオラクル騎士団に入団しては」

「断る」

「そう言うと思ってました」

ガッツの即答に、イオンは苦笑いした。

「まだ早いですが僕はもう休みます」

「解った」

アニスにも伝えとくと言って、ガッツはイオンの部屋を出た。

深夜を回ったところ、相変わらず眠れないガッツは暇つぶしにしていた武器の手入れもやりつくしてしまい、部屋の片隅でマントに身をくるんで蹲っていた。

普通ならベッドに横たわるべきなのだろうが、ガッツの場合そうすれば余計眠れないことは本人が一番よくわかっている。

眠ろうにも眠れない、体が闇に対して拒絶反応をしているようだ。

一方のパックは立派な鼻ちようちんを作っていたが。

この世界に来てからのほうが夜を長く感じてしまう。

何もしないと時間の流れが遅く感じるのだろうか。

だがどうしようもない。

烙印を刻まれ、それでもなお生き続ける。

それは人の身にとって、あまりにも酷なことだった。

それでも彼が剣を振り続けたのは復讐のため。

しかしそれは、いつのまにかどす黒い炎となり。

彼自身の大切なものまで焼きこがしてしまいそうになる。

それを防げたのは、新たな仲間のおかげである。

故に仲間の大切さは彼自身よくわかっているのだ。

だがその仲間ですらも、焼き焦がしてしまうのではないか。

その恐怖感は、さらに彼自身を蝕んでいる。

この世界に來た理由が、もしもこの新たな仲間達を守ることなのだ
としたら。

自信がない、生き残ることよりもとても難しいことだ。

守ることの大切さを知るには、あまりにも遅すぎたのだ。

朝が近くなる、光に包まれたところようやく眠気が出てくるのだが。

ドアの外に気配を感じる。

しかしその気配はそのまま過ぎ去っていった。

ガッツは溜息をつきながらも立ち上がり、ドアの外に出る。

そこには、

「やっぱお前か……」

「あ……ガッツ」

イオンであつた。

「今度はどこに行く気だ？」

「いえ、ただ散歩してこようかと」

やれやれといった感じでガッツは頭を抱えた。

「……少し待ってる」

そう言つてガッツは自分の部屋に戻る。

しばらくして、装備一式を身にまとつたガッツが出てきた。

よく見ればパックも来ている。

「そんな、散歩一つで大げさです」

「いいじゃんいいじゃん、俺も行くよ」

「……お前は抜けてる部分があるからな」

念のためだと付け加え、ガッツとパックはイオンと共に外に出た。

「体はいいのか？」

「ええ、大分いい感じです」

イオンは朝焼けが眩しい街並みを見てそう言った。

その顔は何故かニヤけていた。

「……なんだよ」

その雰囲気には堪らずガッツが聞いた。

「いえ、ガッツほど見た目と違う人も珍しいと思ひまして」

その言葉の意味がいまいち解らず、ガッツは首をかしげたままであった。

その様子がおかしいのか、イオンの顔は緩んだままでパックは明らかに悪意に満ちた笑いをしていた。

「……ガッツの世界も、朝はこんな感じですか？」

「……ああ」

まだ朝早いため、人通りは殆んどない。

「……イオン、来たみてえだ」

故に殺気をガッツはすぐに察知した。

すぐさま、パックもガッツの鞆の中に潜り込む。

「ガッツ……」

「……広いところに行くぞ」

元の宿に戻るには遠かった。

だからここそこで全員仕留めるしかない。

そして二人は広場らしきところに出た。

相手もこちらが気付いたことに気付いたらしく。

多くのオラクル兵が二人を包囲した。

さらに四人の人影が出てくる。

「久しぶりだね」

シンク、リグレット、アツシュ。

そしてもう一人、ガッツより大きめの体格の男。

ガッツは見覚えがあった。

以前イオンに渡された資料にもいた。

恐らく六神将の一人。

「おとなしくしろ」

「またもや、導師様が目的か？」

挑発じみた調子で、ガッツが問う。

「それもあるがな、今日はお前にも用がある」

リグレットが銃を突きつけながら答えた。

（さて、どうしたもんかな）

全滅させることができないことはない。

しかし、あの四人は強い。

それに加えて周囲の兵が囲むようにかまえている。

イオンを守りながらだときついものがあつた。

「ガッツ、ここは彼らの言う通りにしましょう」

イオンが臆せず言う。

「こちらとしてもそうしてくれるとありがたい」

「癪だけどあなたの強さはよくわかってる。戦いの最中、導師を傷つけるなんてことはこちらもしたくないんだよ」

「安心しろ、別にどちらも殺すつもりはない」

もちろん、イオンに危害は加えたくないのはガッツも同じだ。

加えて向こうにはアッシュがいる。

ルークとの関連性が見えてきた以上、彼にもいろいろと聞いておき

たい。

「……………」

そう考え、ガッツは剣を置いた。

「懸命だね」

その言葉と共にシンクはガッツに近づいて行く。

ガッツは持っている義手以外の武器をすべて没収された。

「すみません、ガッツ……………」

拘束される中、イオンがガッツに話しかける。

「僕が足手まといになってしまいました」

「相手は取って食おうって訳じゃねえんだ、気にすんな」

イオンには真意を話さなかった。

このレプリカの問題は恐らくイオンにも関係しているからだ。

（まずは、どうにかして話を聞きたい）

まずはそのことであつた。

「それに俺の荷物にパックが紛れてる、大丈夫さ」

小さな声で話す。

そうですね、とイオンも不安を感じながらも答える。

しかし、

「導師はこちらに来てもらう」

そう言ってアッシュはイオンを別の方向に連れて行った。

「悪いがお前はこれから船に乗ってもらう、お前と是非一度話してみたいという方がいるのでな」

ガッツに大きめの枷を施しているにも関わらず、リグレットは銃を突きつける。

「……………」

「さっさと歩け！！」

仕方なくガッツは無言で従う。

多くの兵士と共に、朝日の中ガッツは港へと連行されていった。

動き出す者たち（後書き）

だれが話しているのかわからない部分があると思います。

でも一々　　が言った。という風に書くのは説明臭くなるのであまりしたくない。

敵の技もあまり出せていない。

というわけで何かいい文の書き方、後ボスがどのような技を使うかなどアドバイスをや情報提供をお願いします。

作者のほうでも努力はします。

いいものを書きたいので、皆様御協力をお願いします。

ほかにも御意見・御感想をよろしくお願いします。

計画の始まり（前書き）

なんか物語に全然厚みがありません。

話が飛びに飛んですいません。

それとナタリアファンの皆様、これまでに出不入に済みません。

計画の始まり

捕まってから大分時間が過ぎた。

足音が響き、眠っていたガッツが目を覚ます。

音はガッツが入っている牢屋の目の前で止まった。

「ちゃんと話すのはこれが初めてだったかな」

「……やっぱ手前か」

ガッツの前にはルークの師匠と聞いていたヴァン・グランツがいた。

「師匠面はとうとうやめたのか」

「どついうことかな？」

「とぼけんな。お前あいつの師匠の振りしてるだけだろ？ あいつに対する態度は全て上辺だけだ」

その言葉にヴァンはクックックと笑う。

「鋭いな。その上かなりできるようだ」

「あん？」

「お前の戦いぶりは何度か見せてもらった。……できれば、私もお前を雇いたいと思ってな」

ヴァンがガッツを見据えて言った。

「私の計画を遂げる為に、お前の力を使いたい」

しかしガッツは不敵に笑う。

「……悪いが他を当たってくれ、俺はもうイオンに雇われてる」

「導師以上の金は用意するが？」

「残念ながらあいつには金で雇われてるわけじゃなくなてな」

「……では何で動く」

「少なくとも、あんたのために動く気はねえ」

ふう、とヴァンは溜息をついた。

「ならば仕方がない、ここからは永久に出られん」

その言葉にガッツは無言のままだった。

「この船は目的地に着いたら乗り捨てられる。お前はそのまま船と共に運命を共にすることになる」

「小さなお友達に中を探らせているようだが、この牢屋の鍵は番号式だ。番号がわからなければ開くことはない」

今だ無言のままのガッツを見て、ヴァンはそれを凶星を突かれたか

らだと解釈した。

「気が変わったらいつでも言えばいい、目的地まではまだしばらくかかる。よく考えておくことだ」

ヴァンが去ろうとした時だった。

「聞きたいことがある」

「……何だ」

「ルークがその生態レプリカってやつなのを、お前は知ってるんだな」

「勿論だ……」

「それも、お前の計画とやらの一部ってわけか」

「それ以上は答えられん。尤も私の話を受けるなら話は別だが」

その言葉にガッツは不敵な笑みで答えるのみであった。

「……最後にもう一つ。アッシュカルク、このどちらかがユリア、またはローレライとなんか関係あんのか？」

その質問にヴァンの後ろ姿が少し揺らいだ。

「……知らん」

しかしそれだけ言うと、ヴァンはまた足音と共に消えて行った。

何か知っているとみて間違いはないだろう。

なんかしらの関係があるとすれば、それがそのまま自分自身がこの世界に來た理由となる。

そんなことを考えていた時だった。

「ガッツ」

ヴァンが言っていた小さなお友達だった。

「だめだ、鍵がどこにも見当たらない」
「知ってる」
「て、あれ？　なん
で？」

「御大層にあの髭面が教えてくれたよ」

「髭面？」

「あのルークの師匠面してた奴だよ」

「あゝ、てかあいつがやっぱ黒幕なの！？」

「どうもそうらしい……」

奴の計画がどのようなものかを知ることこそ重要なことかもしれない。
それがあの二人に関わっている可能性が出てきたからだ。

本当ならどうでもいいと言いたいところだが、元の世界に戻る唯一可能性のあるものである。

(……背に腹は代えられん)

このことである。

尤も、可能性があるといっても微々たるものだが。

「……俺の荷物の場所は把握したんだろ」

「おう!! それはばっちり」

「それとアッシュはいたか？」

そう、イオンと別の場所へ向かったようだが一応パックに探させたのだ。

「うっん。やっぱりないみたいだったよ」

出来れば話を聞きたかったのだが。

確信はないが、わざと自分と接触させないようにしたのかもしれない。

「……まあいい。まだ時間はあるんだ、俺はもう少し寝る」

「おう、なにかあったら起こしてやるよ」

前にもこんなことを言ってたが、その時はダメだったのであまり信用しないことにした。

時間がたち、牢屋の前に気配がしたためガッツは眼を開けた。

「……目的地に着いた。無駄かもしれんが一応答えを聞こう」

「無駄だと解ってんなら聞くな」

「そうか……残念だ。……おい撤収を始めろ」

「ハッ!!」

回りの部下に命令を下し、ヴァン自身もこの艦から出る為に立ち去ろうとする。

「……あんたが何をする気かは知らねえが」

その言葉にヴァンは立ち止り振り返る。

「宣言するぜ。必ず失敗する……」

「……ほう、何故だ？」

その返しに今度はガッツがクックックと笑う。

「……それすら解んねえか、じゃあ行っても無駄だ」

「その言葉もしも負け惜しみだしたら、そのままお前に返そう」

しかし負け惜しみではない、ガッツは知っている。

本当に何かをなさそうとするなら、障害と思えるものはどんな手を使っても確実に排除しなくてはならない。

そう、嘗てのあいつのように。

「……お前が私の計画に加わってくれるのなら。今からでも遅くはない、ここから出してやるぞ」

だがガッツの答えは変わらない、こいつについて行っても自分に有益なものは何もない。

「……さらばだ」

そう言つて、ヴァンはそのまま部下達を引き連れて立ち去った。

そしてさらに時間がたち、あたりに人の気配がなくなった。

バックも、

「うん、この中には人っ子一人いないよ」

と断言した。

「……解った」

そう言つて、ガッツは何故かやつらが取り上げなかった義手を牢の

扉にかざした。

奴らはこれをただの義手と勘違いしていた。

それも無理はないだろう、この世界ではイオンにすらまだ見せたことがないのだ。

そして義手の根元の金具を引っ張る。

『ドゴン！！！！！』

狭い牢に轟音が鳴り響いた。

その音にパックは失神しそうになる。

何をするかは解っていた。

だが解っていても、その音は頭にこれでもかと言っほど響いた。

一方のガッツはそんなことはお構いなしに、無残な姿になった鉄格子をまたぎ。

気絶しているパックを無理やり起こした。

「うゝ、まだ……頭が……」

「速くしろ」

「あゝもゝ、解ったよ」

何とか持ち直したパックは、ガッツを案内した。

「ゲワツ!!」

「ギャア!!」

艦の出入り口の周囲にいた兵士どもを蹴散らし、ガッツはすぐさま現在位置を確認しようとするが、

(……何だ？ 辺りにたちこめてるこれは)

そう、辺りにはまるで黒い靄のような物が掛かっており、およそ人がいるべき場所ではなかった。

(まるで…クリフォトだ)

そう、幽界の暗闇の部分と雰囲気酷似していた。

あの淀んだ空気は未だに覚えている。

一体奴はここで何をする気なのか。

「うわゝ、淀んでるね」

いつもの口調ではあるが、パックも顔をしかめている。

「あ!! 近くにアッシュカルクか解んないけど居るみたいだよ!!」

「本当か！？」

「うん！ こっちこっち！！」

パックが気を感じ、ガッツはそれに従う。

そしてそう遠くない場所に、服装からみてアッシュと思しき者が誰かと話していた。

「ティアだ！！ あれティアだよ！ おーい！！」

パックの叫びにアッシュとティアが同時に振り返る。

「パック！！ それにガッツさんも！！」

予想外の二人に驚くティア。

「どうしてここに！？」

「イオンと一緒に捕まったと思ったら、別々にされてな」

「あのヴァンって人がガッツに力を貸すように丸めこもうとしてきたんだ」

「今はそんなことどうでもいい！！ おい！ あんたも来てくれ、ヴァンに勝てる奴って言ったらもうあんたしかいない！！」

「お願いします！！ 兄を止めてください！！」

その言葉に二人はただならぬものを感じた。

「……パック！　あの野郎は近くにいるのか！？」

「待って……いた！　あっちのほうだ」

そう言つてパックは寄りこの黒い靄が深い方角を指さした。

「よし、行くぞ」

事情はよくわからない、だが今あいつはここで仕留める。

ガッツは走り出した。

「速くあの屑を止めないと、みんな死ぬぞ！！」

走りながらアツシュが叫ぶ。

だが目の前に兵士が立ちふさがる。

「シッ！」

だが素早くガッツが投げナイフを的確に当てる。

「ガッツ！？」

そしてそれを見ていたジェイドと鉢合わせする。

「ガッツ……今までどこに」

しかしそれを無視してガッツは奥へと走り去る。

ティアがジェイドと話しているので説明してくれるだろう

そして黒い靄が出てくる洞窟の入口に、アッシュと共に入っていく

(どうやら……ここは鉱山跡か)

辺りに散乱する採掘道具を見て予測する。

「ガッツ？ あんた今までどこにいたんだ？」

振り返るとガイと、キムラスカで会った少女が隣にいた。
ナタリア

「後で話す。今は時間がねえ見たいなんでな」

「お前らも早く逃げろ！」

そう言っただけのまま駆け出す。

走る、走る、走る、そして

「ここだ！」

小さな入口がある場所へと到着した。

「まだ、間に合うか？！」

そして二人とも中へと入って行った。

中は薄暗く、今まで見たことがない作りになっていた。

(……ここは？)

「畜生！！間に合わなかった」

よく状況が飲み込めず、ただヴァンを斬るために来たガッツとは違いアッシュは既に状況をのみこんでいるようだ。

「アッシュ、お前は来るなと言ったはずだ」

その言葉と共にガッツがヴァンを見据えた。

そして次の瞬間にはヴァンに斬りかかっていた。

「チイツ！！」

二人が同時に舌打ちをした。

ヴァンはグリフィンに乗りガッツの剣から逃れる。

「貴様、何故ここにいる！？」

「決まってるだろ？ お前がちゃんと殺さなかったからだ」

その言葉にヴァンが苦虫を噛み潰したような子をする。

しかしすぐさま口笛を吹き、もう一体のグリフィンがアッシュを捕

えた。

「離せ！ クソッ！！」

「イオンを救うつもりだったが、今ここでお前を失うわけにはいかぬ」

「兄さん！！」

するとティア達が傾れ込んできた。

失敗したガッツは、傍らで気絶しているルークを担ぎあげる。

「裏切ったのね！！ 外殻大地は存続させるって言ったじゃない！！！！」

「メシュティアリカ、お前にもいずれわかる。この世界の愚かさ醜さが……。それを見届けるためにも生き抜くのだ」

その言葉と共に、グリフィンの高度を上げて行く。

「お前には譜歌がある、それで……」

そして飛び去って行った。

「兄さん！！！！」

その叫びは、悲しく木霊するだけであった。

そして突如空間が崩れ始める。

アニスが倒れていたイオンをトクナガで連れてきた。

「みんな、私の傍へ！！」

ガッツもルークを肩に担ぎながら走る。

そして崩壊が激しくなり始めたころ、辺りに美しい歌声が響いた。

（あれ？ この歌……どこかで……）

パツクはガッツの荷物に紛れながら、そう考えていた。

計画の始まり（後書き）

ガッツとヴァンはそりが合わないという作者の勝手な想像で、二人のやり取りはこのようになりました。

描きませんでした。ガッツは一応キムラスカに二度訪れてるのでナタリアを見たことがあるという設定になっています。

突っ込みどころが満載だと思いますので、御指摘を頂けたら幸いです。

そしてできれば、御意見・御感想をいただきたく思います。

もう一つのクリフトと……（前書き）

ガッツのキャラがどんどん丸くなっていくような気がする。

それに意外とパツクを話に混ぜて行くのが難しいです。

もう一つのクリフトと……

泥の海、そこらじゅうに蔓延する障気。

そして上を見上げれば遥か高くに、自分達がいた地上があるという。

（……似ている）

障気がより一層強くなったからだろうか、そこはかつて訪れたクリフトととてもよく似ていた。

だが似ているということは、つまり決定的に違う部分があるということだ。

魑魅魍魎の類がない、あまりに広すぎる。

いろいろと違う部分は思い当たる。

（だがそれだけじゃねえな……）

そう、うまく言えないがもっと決定的に違うものがある。

だが、

（元の世界に帰る手掛かりはあるかもしれねえ）

という思いはあった。

「行けども、行けどもなにもない……なあ、ここは地下か？」

今彼らはタルタロスの看板にいた。

そこでこの茫漠とした景色を見ていたガイが言った。

「ある意味ではね……ここはクリフトよ」

その言葉にガッツはその景色を見ながら小さく笑った。

まさか名前が同じとは思わなかったからだ。

その小さな笑いは、他に気付かれることはなかった。

そしてティアはここにいる皆に説明した。

外殻大地のこと、

この空間の成り立ち、

そして自分がこの空間にあるユリアシティの出身であることも。

「それでは何故こんなことに？ 話を聞けば外殻大地は柱に支えられているのでしょうか？」

「……その柱が、消滅したんです」

ティアのその言葉に、その場にうずくまっていたルークに視線が集まる。

「おっ俺は何も知らねえぞ！」

ルークは何とか否定しようとする。

しかしその行為は、仲間の視線をより冷たいものにしてしまった。

「あなたは……兄に騙されていたのよ」

「俺は…障気を中和するために……」

「だが結果は結果だ、その柱とやらはお前が消したんだ」

ガッツが現実をルークに突き付けた。

「そうですね。アグゼリユスは消滅してしまいました。多くの犠牲と共に」

「……お、俺が悪いつてのか？」

自分に責任がかぶさりそうになり、ルークは必死に否定した。

「俺は悪くねえっ！！ なんも、なんも知らなかったんだ！！ そ
うだ、師匠が！ 師匠がやれって言ったから……こうなるなんて知
らなかったんだ！！ 誰も教えてくれなかっただろっ！！」

だがその行為は、一気に皆を落胆させた。

それはただ子供がわめくようにしか見えず、全員が啞然としてしま
った。

「……ブリッジに戻ります。ここにいると馬鹿な発言にいらいらさ

せられる」

ジェイドは不快そうな表情でその場から立ち去った。

「なんだよっ！！」

「変わってしまったのね……記憶を失ってからのあなたはまるで別人ですわ」

変わり果ててしまった幼馴染を見て、ナタリアは悲しそうに去って行った。

「おまえらだって、なんもできなかったじゃないか！俺ばっか責めるな！！」

「あなたの言う通りです。僕は無力だ。だけど「イオン様っ！」」

イオンの言葉をアニスが遮る。

「こんな最低な奴、ほっといた方がいいです！」

アニスはそう言って、イオンの腕をとり立ち去った。

「わ、悪いのは師匠だ！なあガイ、そうだろ！？」

「ルーク……あんまり幻滅させないでくれ」

そう言ってガイも立ち去る。

どうしていいかわからず、ルークの視線はティアを縋る様に見つめ

る。

「ティア……」

「少しはいいところもあるって思ってたのに……私が馬鹿だった」

ティアもそのまま仲間達の後を追う。

そして残ったのはガッツだけになる。

「ガッツ……」

「……お前はなんかしたのか？」

「えっ？」

何のことか解らず聞き返すルーク。

「お前はさっき、俺たちになんもできなかったといったよな……そう言うお前はなんかしたのか？」

「俺は……障気を中和しようと「それはあいつに言われたからやっただろ、結果はともかく」

ガッツの鋭い隻眼がルークを射抜く。

「言われたからやるってのは、ガキの使いつてんだぜ」

「俺はガキじゃねえ!!」

その言葉にルークが声を張り上げる。

「……そうか、だったら自分がやったことには責任持て」

「そ、それは……」

「大人なんだろ、それくらい考えろ」

そう言っただけでガッツも立ち去って行く。

立ち去った後、ルークの喚き声が響いた。

「ふえー、ここがユリアシティ」

一先ずの目的地に到着し、タルタロスから降りた一行は地上の町とは違う雰囲気を感じる。

「見たことのない材質ですね……」

「はい、我々もどのようにして作られたかは把握していません」

この街は相当古い造りであるが、どこも劣化しているようには見えない。

「奥に市長がいます。行きましょう」

そう言っただけでティアは皆を案内するが、後ろにぼつんとしているルークに眼をやった。

ガッツもそれを見ていたが、気にするそぶりもせずまた歩き出す。
どうするかまで面倒をみる気はない。

そこまで世話を焼くほどお人よしではないし、だいたいがどうしてやればいいのかも解らないのだ。

だから自分で何とかしてもらうしかない。

そのためにも、ティアは彼にとっていい話相手になるだろう。

そう思いまた後ろを見ると、ルークとティアのほかにもう一人いた

（あいつは……）

アッシュだった。

それに気づきガッツは駆け出した。

後ろで誰か自分に声をかけたようだったが、振り返らずにそのまま走って行った。

アッシュはルークに対してどなり散らしているようだった。

「こんな奴のせいで、俺の居場所が奪われたかと思うと……情けなくて反吐が出る」

「う、嘘だ……」

そして斬り伏せられたルークは、ぐらついたかと思うといきなり倒れた。

「ルーク？」

ティアが異常に気付き駆け寄ろうとするが、アッシュはかまわず止めを刺そうとする。

「アッシュ！ やめて！！」

だが剣が振り下ろされることはなかった。

アッシュが振りかぶった剣を、ガッツが後ろから押さえていたのだ。

「何だ！！ 邪魔すんな！！」

だがガッツは構わずアッシュに足をかけて転ばした。

「ぐわっ！？」

ガッツはそのままルークに歩み寄り、そのまま肩に担いだ。

「ティア、どこかに寝かす場所あるか」

「えっ！？ あ、じゃ、じゃあ私の家へ運びましょう」

いきなりのもので少し放心状態だったティアは、驚きながらも答えた。

「おい待て！！」

転ばされたアッシュは立ち上がり、ガッツに怒鳴りながら剣を突きつけた。

「……なんだ」

「なんだじゃねえ！！ 何故邪魔した！！」

怒鳴り散らされていながらも、ガッツは表情を変えていなかった。

「……前に、お前に止めを刺さなかった理由と同じさ」

「ああ？」

アッシュは意味が解らず首をかしげる。

「……お前がこいつに何を期待してたかは知ったこっちゃねえ。だがこいつはお前のレプリカであつてもお前じゃねえんだ。」

ガッツはそう言って、踵を返した。

ルークをティアの指定した場所に置いたガッツは、この街で元の世界へと帰るための手掛かりを探すことに決めた。

だがティアが一応皆が集まってるので、そこに来てほしいとのことだった。

「皆いる？」

ティアとガッツは街の中央にいる、仲間のもとへと近ずいて行つた。

「アツシユが見当たりませんの……」

「それなら先程、ティアの家へと向かっているようでしたよ」

二度手間となってしまうが、ティアはアツシユを呼ぶためまたもや自分の家へと行くことにした。

ガッツは一応雇い主のイオンに、自分がしばらくこの街で調べるところを伝えることにした。

「ここなら、なんか解るかもしれないと思つてな」

「確かに……そう言うことならいいでしょう」

「……すまねえな」

「どうせならこの際、皆さんに言ったらどうですか？」

イオンに言われ、それも一理あると考えたガッツ。

どうせいつか話さなければならぬことだ。

それになんかしらの情報も聞けるかもしれない、可能性はかなり低い。

そう思つたころ、ティアがアツシユを連れて戻ってきた。

「それじゃあ、市長のもとへ行きましょう」

「その前にちょっといいか？」

その言葉に全員の視線が、ガッツに集まる。

「言っておきたいことがある」

「なんですか改まって？」

「俺はしばらくこの街に残る」

その言葉にイオン以外の全員が、意外な表情をした。

「まさかガッツ、あの馬鹿のことを」

「勘違いすんな、アニスお前も知ってんだろ俺の生い立ち」

「ふえ？ ああ、異世界から来たって言う」

「異世界？」

話が見えないアニス、イオン以外の人間が首をかしげる。

そこでガッツの口から出た話は、とても信じられないものであった。

自分とパックが異世界から来たこと、

そして謎の声に導かれこのオールドドラントに来てしまったこと、

そしてその声が自分に誰かを助けてほしいこと、

そしてそれがアツシユとルークであるかもしれないこと、

その話に一部であるが、アツシユは合点がいったようだった。

「だから俺に止めを刺さず、あの屑を殺させなかったのか」

「まだ完全に決まった訳じゃねえが、情報が少なすぎる」

「それでここで情報を集めたいと、そういう訳ですか」

ジェイドがメガネを直しながら言う。

「ああ、もう雇い主の許しはもらった」

ガッツはイオンを親指で指さす。

「だからティア、ここの資料室とか、物知りの奴とか教えてくれるとありがてえんだが」

「解りました、私もしばらくここにいますつもりです。協力しましょう」

「助かる」

「ですがまあ市長に会ってからにしましょう、いろいろと我々も聞いておきたいことがあります」

ジェイドの言葉で、一行は奥の市長のもとへと向かった。

もう一つのクリフォトと……（後書き）

もう少しガッツにもう一つのクリフォトに対して、リアクションをとらせたかったです。

御意見・御指摘・御感想をお待ちしております。

異変の始まり（前書き）

この話はマジでやっちゃったな〜って感じですよ。

これからさらに更新が遅れるかもです。

異変の始まり

市長がティアの祖父であるらしかったが、ガッツのはそんなことは関係なかった。

話が粗方終わり、ガッツとティアは一行の出発を見送った。

そして市長であるテオドールに話を聞いたのだが、目ぼしい情報は皆無だった。

そこで現在は案内された資料室で、しらみつぶしにユリアやローレライのことを調べていた。

「ガッツさんこの世界の文字読めるんですか？」

「……前にアニスとイオンに基礎は教えてもらったからだいたい読める」

「そうですか……でも世界を越えて助けを求めるなんて、この世界には何が起るんでしょう」

「そういうことはスコアに読まれてねえのか？」

「いえ……すみませんが聞いたこともありません」

二人は資料室で何か有益な情報がないか奮闘していたが、既に一日と半日が過ぎていた。

ガッツに至っては徹夜までしている。

尤も慣れたものだが。

「あいつはまだ起きねえのか？」

「今パックとミュウが見ていますが、全く……」

資料に目を通しながらティアは首を振った。

ルークは特にうなされることもなく、ただ眠り続けていた。

「……おい、ここ教えてくれ」

「はい、ここはですね……」

基礎を教わったといってもよく解らないものや、変わった文体で書かれたものもあり、そこはティアに助けられながら調べている。

「少し、休憩しませんか」

この街にいと時間を感じないのだが、さすがに今日ぐらいは休んだ方がいい。

「時間がありますから、ガッツさん……」

「……わーったよ、だからそんな目で見るな」

どうもこういう女には弱いガッツだった。

「でも何となく納得しました、ガッツさんが異世界から来たっていう話」

ティアの部屋に戻った二人はティアが出した料理を、パックとミュウを入れて一緒に食べていた。

「なんだそれ？」

「この世界は情報が回るのが結構速いんです。ですからガッツさんほどの人なら、大佐ぐらい名前が売れてるものなんですよ」

そんなもんか、と呟きガッツはパンを口に運ぶ。

「ねえパック、ガッツさんは元の世界で何してたの？」

ミュウと料理を取り合ってたパックに聞く。

「うーん、そうだな」

あまり素直に言える内容ではない、使徒と呼ばれる者たちと戦い亡霊どもを斬り続ける。

こう素直言つては、自分達の世界を誤解されかねない。

そこで、

「……ある意味、この世界でやってることと変わんないよ」

「そうなの？」

その言葉にガッツも少し首をかしげた。

実際何か素っ頓狂なことを言えばポキャツとやるつもりであった。

「そ、昔はやんちゃだったけど、今は仲間を守るために剣を振ってるって感じかな」

その昔が気になるが、ティアは何となく納得した。

ガッツも内心ではまあそれでいいかと、自分を納得させた。

「うまかったぜ、ありがとよ」

食事を終えたガッツは立ち上がり、資料してへ行こうとした

「ガッツさん、私はもう少しここで休んでいいですか？」

「別にいいぜ、つき合わせてんのは俺だしな」

「すみません……」

「……解んねえとこがあったらあとでまとめて聞きに来る」

そう言っただけでガッツはティアの家を出た。

その後も調べ続けたが、あまり進展はなかった。

解らない部分は後でティアに聞くとしても、何となくその部分も期待できるようではなかった。

（もともと、調べもんは好きじゃねえからな）

剣を振り続ける夜はあっても、本を読み続ける夜はなかった。

やはり地上に出たほうが手掛かりがあっただろうか。

もう少し粘っても情報が手に入らなかったら、また外殻大地に戻るうかと考えていた。

その時、

「ガッツ、ガッツー！！」

資料室に小さな影が入ってきた。

「どうした？」

「それがね、ルークが目を覚ましたんだよ」

にもかかわらず、そうかとだけ言ってガッツは資料に目を戻した。

「それで、ガッツのこと呼んでるから来てだって」

「……俺を？」

「うん、ガッツに聞きたいことがあるって」

心当たりがない、今まであいっはずっと眠りこけていたはずだ。

「……わーっ たよ」

ガッツは資料を置きティアの家へと向かう。

そこには髪を切ったルークがいた。

「……どうしたんだ、それ」

いきなり髪型が変わったので、一応聞いておいた。

「彼は変わるんだそうです。これはその決意」

ティアのその言葉に一瞬だけガッツは固まったが、すぐにここへ来た用事を思い出す。

「で、俺に何の用だ？」

「あ、そうだガッツ実は……」

ルークは自分がレプリカであるためアッシュと繋がり、彼らが外殻大地で見たものが見えたのだということを話した。

「で、それでなんで俺に用があるんだ？」

「その前に聞きたいんだけど……髑髏の甲冑を着た騎士って、心当たりある？」

ルークが目覚める少し前。

ワイヨン鏡窟でヴァンの計画の手掛かりを一行は探し終えていた。

「結局総長が、なんか大きなレプリカを作るつもりだってことしか解んなかったね」

出入り口で待っていたイオンと合流した時、アニスはそう言った。

「今はそれで十分だ、後は俺だけでやる。お前達を故郷に返してやる」

ダアトに帰りたがっていたアニスとイオンにそう言った時だった。かなり大きな揺れが起こる。

「これは……南ルグニカ地方が崩落したのかもしれないな」

その言葉にアッシュ以外の仲間が驚愕する。

「あの屑がセフィロトツリーを消滅させた影響だ。今まで持ちこたえていたようだが、もう限界のはずだからな」

「じゃあ、速くなんとしなければなりませんわ!!」

「言っただろう、もうお前らは……」

そのときだった、一行を異様な殺気が襲う。

しかもその気配はもうすぐ後ろにいるのだ。

驚いたことにその気配を誰も察知することができなかった。

全員が金縛りにあったように動けない。

（おい、なんなんだよ）

（うるせえっ！ お前は黙ってる！！）

その殺気は繋がっていたルークも感じたようで、その声は震えていた。

アッシュは感じた、

（俺の後ろにいる……）

（……くっ、殺られる！！）

そう思った時、長年戦場にいた体が後ろにいるはずの気配のもとへと剣を振った。

しかし、

（な、馬鹿な……）

そこには何もいなかったのだ。

そしてそれを皮切りに、全員が何とか金縛りから動き出した。

だが、このまわりつくような異様な気配は消えていない。

そして洞窟の闇の中から、馬の蹄の音が響く。

闇の中から全員の目の前に現れたのは、髑髏の甲冑を着た騎士であった。

（馬鹿な、確かに俺達のすぐ近くにいたはずだ）

（一体こいつは……）

（ま、まさか死神なんかじゃないよね）

「もがく者を追っていたつもりであったが、ここではなかったか」

その騎士が発した声は、頭に直接響くような声だった。

（もがく者？）

（何のことだ）

「尤も、器の一方に会えたのは幸運であったな」

「おいてめえ！！ 一体さっきから何言ってやがる！！」

アッシュが剣を構え怒鳴る。

「器の複製も聞いているのであろう」

（な、まさか器ってのは……！！）

複製という言葉でアッシュは気付いた。

こいつは自分とルークのことを知っているのだと。

その時イオンは、？く者という言葉に引っ掛かっていた。

（お前はそこで戦えばいい、必死に抗い、もがけばいい）

以前ガッツに言われたことであつた。

（まさか、この人は……）

そう思いイオンは前に出る。

「ちょ、ちよつとイオン様！！」

「お前は下がってろ！！ イオン！！」

しかしイオンはその言葉を無視した。

「もしかして、あなたはガッツと知り合いなのですか？」

その言葉に全員がイオンを見た。

「以前、ガッツが僕に言いました。戦って、抗って、もがけと。あなたは彼を知っているのですか？」

髑髏の騎士はしばし沈黙する。

そして、

「やはりここに来て間違いはなかったようだな……いや、これも因果の流れの中か」

その場の全員が訳も解らず、ただ臨戦態勢を維持していた。

「ならばもがく者に伝えよ。先の大地の消滅により生じた人の子の絶望が、次元を開き使徒の何匹かがこの世界に訪れた」

（使徒……？）

（何を言っているんだ……）

「その中には不死者も混ざっているようだ……そして奴らは鷹の命で動いている。この先、さらに大地が消滅するようならば使徒はさらに増えて行く」

「おい待て！！ 使徒って何だ！？ 鷹ってなんのことだ？！！」

「鷹とは絶対者なり。だが故にそう容易く次元の移動はできぬ。故に器がいるのだ、絶対者に近い器がな」

「近い……器？」

「まだ鷹がこの世界に来る基盤はできておらぬ、それを阻止するならばもがく者の助力を受けよ。使徒どもを元の世界に送り返すか、斬り伏せ滅らしていけば奴らはなす術なく消えて行く……だが不死者はお前達では勝てぬ、努々忘れぬことだ」

そう言つて髑髏の騎士は背を向け闇に消えて行つた。

「おい待て!!」

だがその声は虚しく闇に木霊するだけであつた。

異変の始まり（後書き）

これほど書いておきながら、まだどの場面でどう使徒を出すか決めていません。

何かリクエストがあったらお願いします。

また御指摘・御感想もお待ちしております。

動き出す狂戦士（前書き）

今回はとても短いです。

髑髏の騎士により明らかになった真実。

そしてガッツの本当の戦いが始まる。

今回はそのための繋ぎです。

動き出す狂戦士

話し終えてもガッツは多くを語らなかった。

ただもかく者が自分であること、その髑髏の騎士とは古い馴染みであることは認めた。

だが使徒、不死者、そして鷹のことについては何も語らなかった。

「時期が来れば話す」

それだけであつた。

さて、今三人はテオドールのもとにいた。

ルークは自分のせいでアグゼリウスが崩落してしまったため、その詫びを入れるためだ。

「えと……アグゼリウスのことでは……ご迷惑をおかけして……すみません……でした」

びくびくしながらであつたが、今までのルークからすれば変わろうという意思が感じられる行為である。

「あなたがルークのレプリカですか、成程……しかしアグゼリウスのことは気に病むことはありませんよ」

「どういうことですか……？」

「アグゼリウス崩落はスコアに読まれていた、起こるべくして起こったのです」

その言葉に三人は驚く。

「どういうことお祖父様！！私そんなこと聞いてません！！それじゃあホドと一緒にだわ！！」

「これはクローズスコア、教団でも一部しか知らないことだ」

起こるべくして起きた。

このことにガッツは疑問を持った。

（おっさんの話ではあの崩落によって使徒どもが来たと言っていた……そのために『起こるべくして起きた』のか？）

だがそれだとしたら何らかの形で、使徒やグリフィスのことをその一部の人間が知っているはずだ。

だが昨日聞いた時は何も知らなかった。

知らないふりをしているという可能性も否定できないが。

「でも……兄さんはセントビナーを崩落させようとしているわ！」

そう、ルークの話ではさらなる崩落が起きようとしている。

仮に使徒どもがこの世界に来ることを知っているのなら、その崩落も知っているはずだ。

しかし、

「セントビナーは絶対に崩落しない、戦争はあの周辺で行われるのだ。それにスコアには何も読まれていないのだからね。心配ならばユリアロードを通って外殻大地に行ってみなさい、お前達の心配は杞憂なのだよ」

ガッツ自身髑髏の騎士があそこまで言うのだから、グリフィスがこちらの世界にも来ようとしているのは解る。

そしてその手段のために、ルークやアッシュが必要で、そのために使途をこちらに送り込んでいることも理解できた。

今のグリフィスはまさしく絶対者だ。

恐らくそれはこの世界でも変わらないだろう。

そしてなんかしらの形でこのことを察知したユリアかローレライが、それを阻止するために自分を呼んだ。

これは全員に話した方がいいだろう。

今話してもルークを不安にさせるだけだ。

この世界に来てから久しく感じていなかった、烙印の疼きを感じられたような気がした。

そして三人は外殻大地へと向かう。

ルークは己を変えるため、

ティアは兄を止めるため。

ガッツは己の役目を果たすために。

動き出す狂戦士（後書き）

ただいまどのようにストーリーに使徒を絡ませるか検討中です。

もしかしたら黒の使い魔のほうを、進めることになるかもしれません。

襲撃（前書き）

何とか年内に更新できました。

でもぐだぐだです。その上未だに使徒登場の細かい構想ができていません。

本当にすみません。

襲撃

「これからどうすんだ？」

「え？」

ガッツのいきなりの問いに、ルークは素っ頓狂な声を上げる。

「なんだ？ 何にも決めてねえのか？」

「そう言う訳じゃないけど、ガッツも来てくれるのか？」

「何言ってるんだお前？」

ガッツ自身、ついていく気だったので意外に思う。

「だってガッツは髑髏の騎士が言っていた奴らを追うんじゃない……」

「……いや、それはまだだ」

奴らがどのようにしてグリフィスを呼ぶのか。

それが解らない以上、そのために必要なルークから離れるのは得策ではない。

「追わないんですか？ ガッツさん」

ティア自身もガッツは別行動をとるものだと思っていたようだ。

「あいつも言ってただろ？ こいつとアッシュが目当てなんだ。だつたらいつか奴らから向かってくるさ」

「でも……」

ルークは釈然としない感じだった。

アッシュを通して話を聞いていたため、ガッツの事情もおおむね理解している。

ガッツにはガッツの事情があるのだ。

無理して自分についてきているのだとしたら、そう思ってしまうのだ。

ガッツはその様子のルークを見ると溜息をついた。

「お前は俺に傍にいてほしくないってのか？」

「全然！ むしろ心強いし……」

アグゼリウス崩落がきっかけとなり、ルーク自身にも多くの変化があったのだろう。

ガッツ自身それがいいことかどうかは解らない。

嘗ての彼は確かに酷かった。

だが今の性格もまた、いいものであるとは言い切れない。

「ようやくお出ましかよ。待ちくたびれたぜルーク」

アラミス湧水道に三人以外の声が響く。

そこには剣を携え、岩の斜面に腰かけていたガイがいた。

「ガイ!?」

「へー髪切ったのか。いいじゃん。さっぱりしててさ」

ガッツは二人のやり取りを一步下がって見つめていた。

今のルークにはこういう男が必要なのだ。

声をかけ、共に話し合える仲間が。

自分は剣を振ることではかなにも見出せない。

「そうだガッツ聞きたいことが」

ルークとの話を終えたガイがガッツを見る。

「……お前の聞きたいことは解る、髑髏のおっさんのことだろ？」

「なんで……知ってんだ？」

「こいつから聞いた」

ガッツはルークを顎で示す。

「寝てる間にアッシュと繋がってたらしくてな、だからこいつらもおおよそのことは知ってるさ」

「そうだったのか、じゃあ二人はもうガッツから話を？」

その言葉にルークとティアが首を振る。

「どうして？」

「時が来たらまとめて話す。今は……解らねえことが多いさ」

そう言っただけでガッツは歩き出す。

「さっさと行くぞ。なんとかって場所がやばいんだろ？」

「あ、ああ」

釈然としないものを感じつつも一行は出口へと向かって行った。

そして出口へと到着した時だった。

「よかった。行き違いにならなくて」

「ジェイド？」

そこには珍しく慌てた様子のジェイドがいた。

「ガイに頼みごとです。ルークを待つならここだろうと思いましたがね」

「何かあったのか？」

ガイはジェイドのその言葉に意外そうに答える。

「イオン様とナタリアがモースに軟禁されました」

「なんだって！？」

その言葉に一同の顔に緊張が走る。

「一体どうして！？」

ルークが慌てた様子でたずねる。

「アグゼリユス崩落によりナタリアの生死が解らない、だからキムラスカ彼女を死んだことと認識し侵攻を開始したのです」

「ナタリア、死んだことにされてるのか……」

オールドラントの構造を理解していない人々は、何故アグゼリユスが崩落したのではなく消滅したと思い込んでいるのだ。

「イオン様もそれを防ぐため導師勅令を発動しようとダアトに戻ったところを……」

途中からガッツはジェイドの話を聞いていなかった。

しきりにガッツがあたりを警戒し始めたのに、最初に気付いたのはティアであった。

「どうしたんですか？ ガッツさん……」

その時ティアはガッツの首筋から、一筋の血が流れているのに気がつく。

それを見たパックも顔の表情が険しくなる。

「ガッツ……、まさか、いるの？」

「ああ……、来たみてえだな、早速……」

ガッツは剣を抜く。

だがガッツ以外は状況が飲み込めない。

「どうしたんですガッツ？」

「ガッツ……？」

ガッツはついに気配を捕えた。

一匹、間違いなく……

「使徒……」

「えっ?!」

「それって髑髏の騎士が言ってた……!」

「全員構えろ……」

ガッツのその言葉に全員がそれぞれの得物を構える。

一気にあたりの空気が張り詰める。

「上だ！！」

ガッツが見上げた先は、洞窟の入口のさらに上であった。

そこには見た目傭兵のような男性が一人立っている。

「あれが……？」

ガッツの用途を語る表情からして、人ならざるものを想像していた
ルークが意外そうな声を上げる。

するとその男性は自分達の前に降りてくる。

「見つけたぞ、贄」

「御苦労なこった、わざわざやられに来たのか。異世界まで来て……」

挑発しているガッツだが、その表情は正に得物を狙う獣であった。

「クッククク。図になるなよ小僧！」

男は声の口調を強める。

「人間風情が、使徒である俺を倒せるとでも思っているのか」

その言葉と共に男の肉体に変化が起こる。

纏っていた鎧がメキメキという音と共に軋み始め、その顔もだんだんと人の物ではなくなってくる。

「なっ！」

「これは……！」

ガイとジェイドがかろうじで声を上げる。

ティアとルークに至っては呆然としている。

だがガッツだけが、敵を見据えていた。

そして目の前には化け物がいた。

眼がなく、口には数多の牙が生えそろっており。

手足が異常に発達したように太くなっていた。

四つ足の首長竜のような格好だが、首の付け根の下の部分には醜悪な顔が付いていた。

「贄、ニエエエエエエエ！！」

おぞましい声があたりに響き渡る。

ガッツ以外もようやく我に返り武器を構える。

いや、ルークだけがまだ現実を見られないでいた。

「クッククク、おれはついていけるぞ。まさか主の器までいるとはな
！」

（やはりか！）

ガッツだけが目当てではなかったのだ、どうやってかは知らないが
グリフィスをこの世界に呼ぶためにはルークが必要なのだ。

だが当のルークは怯えてしまっただけ動けないでいた。

『グオオオオオオオオ！！！！』

雄叫びを上げながら襲いかかる使徒。

「エナジーブラスト！！」

すかさずジェイドが譜術を発動させる。それにより使徒は怯むが、
殆どダメージを受けていない様に見える。

「ジェイド！　今のお前が打てる一番威力の高い奴でどのくらいか
かる！？」

突如ガッツが声を張り上げる。

「恐らく、一分ほど……」

「解った」

そう言つて、ガッツは一気に使徒の側面に肉薄する。

『グオオオオオオオオ！！』

それめがけて使徒の首が一気にガッツめがけて伸びる。

「はあっ！」

それをガイが素早い一閃で弾く。

「ぐおっ！？」

だが余りにも使徒の攻撃力が強かったため、ガイ自身も弾かれてしまふ。

（あいつの皮膚、なんつう斬りにくさだ……）

その上使徒の皮膚はゴムの様に弾力があつたため、想像以上に剣でのダメージは低かった。

ガッツはガイのサポートもあり、大剣による一撃を加える。

「ちいつ！」

だが側面への攻撃でも、ガッツの思うようなダメージは与えられなかった。だがそれでもかなりの傷である。

「よっしゃ！」

ガイの顔に希望の表情が浮かぶ、やはりガッツの剣ならダメージを与えられる

『クツクツク！ よく見る』

だがその傷は直ぐに修復され、元通りの状態になってしまった。

『無駄だ無駄だ！ 貴様らの攻撃など俺にはきかん！！』

既に勝ち誇った声で使徒が叫ぶ。

「う、くうつ！」

そのやり取りを見ていたルークは完全に腰が引けていた。

（何なんだよあれ！ あんなのが……）

あれ程の化け物が自分を狙っている、そう考えただけで戦意が喪失していた。

「何ぼさつとしてる！」

だが突如ガッツの声が響く。

「生き残りたいなら戦え！ 変わらずに死ぬ気か！！」

そう言われルークはハツとする。

ここで死ぬことになれば、変われない、誰も救うことはできない。

（駄目だ！ そんなのは絶対！！）

ルークは剣を構える。

「ガイとルークは右から！ 俺は左だ！ 行くぞ！！」

「オーケー！ ティア援護頼む！！」

「了解！！」

三人は一気に襲いかかった。

『小賢しい！！』

突如使徒が周りにぶちまけるように、首の先端の口から液体を吐いた。

「くっ！！」

「避けるルーク！！」

「うおっ！？」

だが三人ともなんとかそれを交わす。

「酸か……」

その液体の後はシュウシュウと音を立て、土や石を溶かしていた。しかもよく見ると、飛散して使徒にかかっているにもかかわらず、

その体は解けていない。

「やばいな……」

「これじゃ近づけない」

「フレイムバースト！」

そこに突如ジェイドの譜術が襲いかかる。

『なっ！』

予想以上に速い術の完成に慌てる使徒。好機と見たガッツは再び接近し。

「シッ！」

凄まじい膂力から繰り出す一撃を見舞う。

「絶破十字衝！」

「通牙連破斬！」

さらにガイとルークが奥義を繰り出す。

『グオオオ！？　ば、馬鹿な！　なんで俺が！！』

傷口に火が回り、もだえ苦しむ使徒。

『いやだ、死ぬのは嫌だあああ！！』

だが既に遅かった、再生も不可能なほどにダメージを受け、もう助からないのは明白だった。

「おい！」

突如ガッツが喋る。

「あの顔色悪い奴らに言っとけ。どこに居ようと、俺はてめえらを殺すってな」

『き、貴様。人間風情で我らが主に勝てると……』

止めの剣をガッツが振り上げる。

『グ、グオオオオオオオ！！！！』

聞くに堪えない断末魔と共に、使徒は遂に果てた。

「おいジェイド」

「何でしょう？」

「何でしょうじゃねえ。一分どころか三十秒も経ってねえじゃねえか」

「大袈裟に言つとけばその分気合が入ると思ひまして」

ガッツが不快感をあらわにしながら舌打ちをする。当のジェイドは涼しい表情だが。

「なっ！」

「ガ、ガッツ」

その言葉にガッツが振りかえる。そこにある使徒の死体に変化が起こっていた。

「捲れてる？ いや……」

「引きずり、込まれてる？」

「これは……」

ガッツ以外が驚愕の表所を浮かべる。使徒の体が、体に飲み込まれていく。得体のしれない何かによって。

「……よく見とけ。これが人間を超越した代償ってやつさ」

ガッツは何も感慨もなくそう言った。

そして気付けば、そこには痩せこけた一人の男の遺体が横たわっていた。

それも大火傷をしており、深い刀傷がいくつか残っている。

襲撃（後書き）

使徒のイメージは、四足で首がさらに長いフルフルみたいな感じですよ。

亀更新どころか、ナメクジ更新になります。

それでも読んでくれる読者のみなさん、本当にありがとうございます。

これからもどうか気長に見守ってください。

御意見・御感想をお待ちしております。

襲撃の後で（前書き）

遅れに遅れました。

本当に申し訳ありません。

余談ですが、只今3DSでアビスをプレイしています。

襲撃の後で

使徒だったものを見る目が、そのままガッツに向く。

無理もない、先程の出来事はガッツ以外の彼らが理解できる範疇ではないからだ。

「これだけのことがあっても、何も話さないのか？ ガッツ！」

ガイが強い口調で言う。

「……………」

だがそれでもガッツは無言のままだった。

「お願いです。ガッツさん！ 使徒とは何なんですか？！」

声には出さないが、ルークもジエイドも表情から同じことを思っているのが読み取れる。

それらを見てガッツが溜息をつく。

「さっさとイオン達を助けに行くぞ」

「ガッツさん！」

「今話せば、またあいつらに同じ事説明しなきゃなんねえだろ。まとめて話した方が手っ取り早い、話すのはあいつらを助けてからだ」

「ガッツ……………」

「そうですね。今は一刻も早くイオン様とナタリアを救出すべきです」

説明はその後でいいでしょう、とジェイドが他の三人に言う。三人は渋々納得し、ダアトへの道を急ぐことにした。

＊

ついにダアトへとたどり着いた一行。ガッツにとってはついこの間脱出の時以来だ。

「やたら人が多いな……」

ルークが初めてのダアトに、圧倒されていた。

「殆どが巡礼者や、預言を読んでもらうために世界中からここに集まってる人達さ」

それを見たガイが説明する。

「で、どうすんだ？ 闇雲に行ったって、どうしようもないぜ？」

ガッツがジェイドを見て言う。

「ええ。ですのでアニスとここで合流する手はずになっていて……」

「うおおおお！！」

突如ガイが拒絶反応を示す。

「いましたね」

「みたいだな……」

ティアとルークは、ガイの悲鳴に驚いているだけだが。

「さ、触られ……」

「アニス！」

ルークはいつの間にかガイの背後に回る込んだ少女、アニスを見て驚きの声を上げた。

「うわっ！アッシュ、髪切った？あ、違った、ルークか。……えええっ、お坊ちゃまがなんでこんなところに居るの？」

けたたましい叫びを一通り上げると、

「アゝニス、イオン様とナタリア救出のための戦力を連れてきましたよ」

「ありがとうございます大佐 うわっガッツまでいるよ」

「いちや悪いのか？」

「そんなこと言ってないでしょ、一人なんているのか解らないのがあるけど」

サラッとアニスはルークに毒づく

「それで、イオン様とナタリアは地下にあるオラクル本部に連れていかれました」

「成程。監禁するなら妥当な場所ですね」

顎に手を当て、ジェイドは思案する。

「どうしますか？闇雲に入り込んでも」

「そうですね……。ティア、アグゼリウスで探していた第七布石が偽物だったという報告はまだしていませんよね」

「え？はい」

「私達をその証人として、本部に連れて行くことはできますか？」

「成程、それなら堂々と潜入できるな」

ガイを含め、その場の全員が納得した

「解りました。早速願いでてみます」

「よし、いこう」

「ちょっと待ってくれ」

そこにガッツが割り込む。

「何か気になることでも」

「いや、たいしたことじゃねえんだが。剣を一本買いたい」

「え？剣ならそれがあるじゃん」

アニスがガッツのドラゴン殺しを指しながら言う。

「室内でこいつを振るってか？お前らの胴体斬らないように振るほど俺は器用じゃねえ」

「成程。確かにそれは御免ですね。ではまず剣を一振り購入しましょう」

とりあえず一行は商業区へと行くことにした。

*

事の真相

アニス「ねえねえ。皆はガッツから、あの死神についての話聞いたの？」

ルーク「いや、まだ何も」

ティア「二度手間になりたくないから。ナタリアとイオン様を助けたら話すって言うてたわ」

アニス「ふん。異世界から来たって言うてるし。ガッツは謎が多すぎだよ」

ジェイド「ですが、例の使徒と言う物に襲われてなお、話さないのもどうかと思いますがね」

アニス「はうあ！なにに、襲われたって」

ルーク「丁度アラミス湧水道を抜けたら、いきなり襲ってきたんだ。最初は一応人の形してたんだけど……」

ティア「戦いに入ったら、いきなりモンスターに変身して襲いかか

ってきたわ」

アニス「強かった？」

ジェイド「あのタフさは、普通のモンスターでも、人間でもあり得ません。攻撃力も並々ならぬものでした。ですが……」

アニス「ですが？」

ジェイド「ガッツは恐らく、あれ程の物をたった一人で今まで相手にしてきたでしょう。過剰なまでの武装、異常に巨大なあの大剣、どれも納得できるものです」

ルーク「……あの強さもな」

大丈夫か？

ルーク「なあガッツ」

ガッツ「なんだ？」

ルーク「大丈夫なのか？その剣じゃなくて」

ガッツ「……ふ、まさかお前に心配される日が来るとはな」

ルーク「だって、その剣だから……」

ガッツ「俺がこれだけ強い。そう言いたいのか」

ルーク「いや、そのう……」

ガッツ「心配すんな、お前は自分のことを考えとけ。なにせこれから相手すんのは、人間だからな」

ルーク「それは……」

ガッツ「変わるんだろ？ならまずは……」

ルーク「まずは？」

ガッツ「腹くくれ」

*

一行は剣を買い、オラクル本部へと潜入を開始した。尤もガッツは余りい剣が買えたとは思っていないようだ。

ティアは一足先にトリトハイム詠師から本部への通行証となってい

る木札を受け取り、他の仲間と合流した。

「いきましょう」

「ああ、早くナタリアとイオンを助け出さないと」

だが潜入したはいいが、ここは言わば敵の本拠地。敵の、つまりオラクルへいの数もかなりの物だ。

丁度入口付近には、侵入者が入ってこられないよう塞ぐように二人の兵士が立っていた。

「さて、まずはあの二人ですね」

不意を突き襲いかかるには、少々距離が長い。
ガッツはティアの手元を見て呟く。

「左、頼めるか？」

そう言った彼の手には投げナイフがあり。

「解りました」

そう言ったティアの手にも、既に投げナイフが握られていた。

「…………合図したら行くぞ」

ティアは無言で頷く。

「……………今だ」

そう言つと同時に

『ヒュッ』

「ぐう！」

「があ！？」

見張りの兵士は同時に倒れた。

「ナイスだ二人とも」

ガイが投げ終えた二人に駆け寄り名が言う。

「行きましょう。時間が惜しいわ」

一行はナタリアとイオンを目指して、オラクルの本部へと潜入を開始した。

「入り組んでるな」

「一応オラクルの大本だしな。侵入者が迷うような構造になってんだろ？」

「大丈夫よ。私が内部を把握してるから」

「それなら、案内は任せますよ」

「はい」

だが現在は、キムラスカ、マルクト間の状態に緊張が高まっている。となると無関係とはいえない、オラクル内でも緊張は高まっている。

「おい！なんだ貴様ら」

「くそっ！」

「そう簡単にはいかねえか」

襲いかかってきた兵士は、剣士が四人、譜術師が三人だった。

「うおおおおお！」

ルークが先陣を切って、相手に斬りかかる。

「ルーク！」

「大丈夫だ！援護頼むぜ」

だが以外にも彼自身冷静に、相手と渡り合っている。

「いっくよ」

アニスもトクナガに乗り、相手めがけて突っ込む。

『ガキイン！』

ガッツも手に持っていた（ドラゴン殺しと比べて）小ぶりの剣で、相手に斬りかかる。

「ぐおっ！」

その余りの膂力に、相手は一気に押されてしまう。
そしてそのまま

「ぐはああ」

鎧ごと相手を切り裂いた。
だが、

「ちっ、所詮数打ちか」

ガッツの膂力に耐えきれず、勝ったばかりのその剣は折れてしまった。
仕方なく相手の剣を拾い、再び相手に斬りかかった。

「はあっ！」

「せああ！」

ガイとルークは互いにフォローし合いながら、譜術師と前衛の兵士を相手取り

「ぐあっ！」

「くふっ！」

同時に二人を倒していた。

「大丈夫かルーク？」

「……ああ」

血ぬられた剣を見ながらも、やけに落ち着いて答える。

「ルーク危ない！」

そこに隙をついてオラクル兵が、ルークに斬りかかってきた。

「うっ！」

だが斬りかかる前に倒れてしまう。

「油断しないで、ここは戦場よ」

ティアが投げたナイフによって、ルークは事なきを得た。

「あ、ありがとう。ティア」

気付けばジェイドとアニスとガッツが、残りの敵を全員倒していた。

「急ぎましょう。時間は限られています」

その言葉に全員が頷き、一行はさらに奥へと進んでいく。

*

見た目

アニス「ガッツ普通の剣も使えんじゃん。なんでそんなバカでかいの使ってんのさ」

ガイ「何か特別な思い入れでもあんのか？」

ガッツ「別に大した理由じゃねえよ。ただ戦場には、一番手に馴染んだもんを持つていきたいだけさ」

ルーク「じゃあもう長いのか？その剣使うようになって」

バック「俺が初めて会ってから、ガッツはこの剣使ってたよ」

アニス「何年ぐらい？」

バック「うゝん……三丁四年かなあ？」

ルーク「て言うかガッツって歳いくつ？」

ガッツ「さあな、余り数えたことあねえな。……だが多分二十歳過ぎぐらいだったはずだ」

ルーク・ガイ・アニス「二十歳過ぎい！！！？？」

ルーク（おい、俺もつと年いつてるもんだと思ってたぞ？）

ガイ（どう見ても俺より年上だろ？）

アニス（やっぱあれじゃない？異世界だから時間の流れとかが違うのかも）

ガイ（そうか！そう言われると異世界から来たってのが真実味を帯びてくるな）

バック「言われてるぞ？ガッツ」

ガッツ「俺が今更見た目気にするような奴に見えるか？」

*

風潰しに部屋と言う部屋を探し続け、教団の客室に一行が行き着いた。

「もうここら辺ぐらいしかないな」

「ぐずぐずしてても始まらない。早く入ろう」

慎重にルークが、扉を開け中を確認する。

「ルーク!?」

「ナタリア!それにイオン!」

二つの人影があり、それは彼らが捜していた者だった。

「ルーク、ですわよね……」

「アッシュじゃなくて悪かったな」

皮肉でも何でもなく、ルークが言った。

「だ、誰もそんなこと言ってませんわ!」

「話は後にしてください。今はここを出るのが先決です」

「皆さん。わざわざ助けに来てくれてありがとうございます」

「導師イオン。この軟禁事件に、兄は関わっていましたか?」

ティアが少し焦りながらイオンに尋ねる。

「ヴァンの姿は見ていません。ただ、六神将が僕を連れ出す許可を取ろうとしていました。モースが一蹴していましたが」

「おそらく、セフィロトツリーを消すために、ダート式封呪を解かせようとしたのでしょう」

「なら急いだ方がいい、奴らが来る前に」

「そうですね」

無事にイオンとナタリアを救出し、ルーク達はすぐさまオラクル本部を脱出した。

襲撃の後で（後書き）

ただでさえ忙しくなってきたのに、いろいろと無計画に作品を載せてしまった結果、こんなに遅れてしまいました。

ですができれば今は黒の使い魔のほうを優先したいと思います。こちらもできれば更新しますが、速度は亀以下です。

こんな作者ですが、御意見・御感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535/>

狂戦士の旋律

2011年10月5日23時04分発行